

京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室
新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要

〔京大植物園内縄文遺跡〕

昭和49年11月

発掘調査担当

京都大学文学部助手 中村徹也

I 調査の経過

本調査は、京都大学北部構内理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に先立ち、予定地内における遺跡確認の調査として始まった。

北部構内においては、これまで2年にわたって農学部総合館建設地およびその周辺・理学部事務棟建設地その他数カ所で発掘調査を行ってきた。その結果厚い白川系砂層をはきんで上方に歴史時代各期の遺物包含層、下方に弥生・縄文両時代の遺物包含層が存在し、これらがかなり広い範囲にわたって様な状況を呈していることを知る事ができた。しかし、どの地点においても明確な遺構は検出されなかったが、遺物の出土状況および地形測量の結果から推して、北部構内の東にある理学部植物園内に遺構の存在する可能性がもっとも強いと考えられるに至った。

今回のノートバイオロン実験装置室新営工事予定地は、遺構の存在する可能性が高いと判断していた理学部植物園の南端に位置している〔第1図〕。

本調査に先立って調査地域内と、その南側にテストピット4カ所を設定した。テストピット内の層序も白川系砂層を境として上下に前述の各包含層が存在することを示していた。したがって本調査は予定地域全面を2期に分け、第1次調査で歴史時代、第2次調査で先史時代を対象とすることにした。

調査の結果、第2次調査で予想されたとおり縄文時代の配石遺構が発見された。この遺構の取り扱いについて京都大学は「遺跡保存調整委員会」を開き協議を重ねた結果、最終的に遺構の移築保存とノートバイオロン実験装置室新営工事計画の推進を決めた。これにしたがって、移築作業をともなう遺構の全面調査の必要が生じ、第3次移築追加調査を行なうことになった。

第1次調査に先立って発掘地域のグリッド設定を行った。将来植物園全域における調査の可能性を考え、植物園南端の中央寄りに基準点〔Q-10〕を設けた。この基準点と真北の基線をもとに10m正方形グリッドで植物園全体を覆った。東西方向はアルファベットで、南北方向はアラビア数字により表示し、グリッド名は各グリッドの東南隅の表示で代表することにした。1グリッド内はさらに5m方眼に区分し北へ1・2、西へa・bと表示し、最小単位5mグリッドを示した〔例 R-10・a-1〕。

先史時代包含層の発掘の際は、遺構の存在する可能性が高く、また土器・石器など遺物の埋

存状況が非常に密であることを予想して、歴史時代の発掘区画より各グリッドの単位を小さくした。ちょうど南北の「S-b」ラインが先史時代層調査区画のほぼ中央を縦断しているため、この「S-b」をセンターラインとして東西南北に3m正方グリッドを18区画設定した。南北に並ぶグリッド列の単位を東から西へa・b・c・dと表示し、東西の列の単位を南から北へ1・2・3・4・5と表示して、グリッド名はこれを合わせて呼ぶことにした〔例 a-1, c-5〕。

調査関係の要領は次のとおりである。

調査対象地	京都市左京区北白川追分町京都大学北部構内理学部植物生態研究施設 増築予定地		
調査主体者	京都大学 総長		岡本道雄
調査指導者	京都大学文学部教授		小林行雄
調査担当者	京都大学文学部助手		中村徹也
	京都大学大学院文学研究科	博士課程3年	岡内三真
	同	博士課程3年	川又正智
	同	博士課程1年	中村友博
	同	修士課程2年	泉 拓良
	同	修士課程1年	上原真人
	同	修士課程1年	宇野隆夫
調査協力者	京都大学農学部・工学部・文学部・法学部学生院生 京都大学施設部 京都大学理学部事務室		
調査期間	(第1次)昭和48年7月23日～9月10日 (第2次)昭和48年9月17日～12月9日 (第3次)昭和49年7月10日～10月12日		
調査面積	約400m ²		

なお花粉分析を大阪自然史博物館の那須孝悌氏にお願いした。地質に関しては理学部石田志朗助教授のご教示を得た。移築技術に関しては、故小橋敏夫氏に手ほどきを受けた。

Ⅱ 地形と層位〔第4図，図版Ⅻ-1・ⅩV-1〕

調査地域は北白川扇状地の南端部で，西へ落ちる扇状台地の末端近くに位置する。ただし縄文時代以前の自然堆積の砂層および礫層を見ると，必ずしも白川系の堆積層だけではなく，高野川系の洪積世砂礫層も観察されるので，古くは高野川系の流れと白川系の流れとによって作られた扇状地であった可能性が強い。標高は約65m。

層位はおおむね整合の水平層であり，地表下約1.2mにみられる厚い白川系黄砂層をはさんで上下の層群に大別できる。上方は床土の下に，5層（部分的にはさらに細別できる）にわたって歴史時代遺物の包含が見られる。これらは北部構内にはほぼ通有の層群である。上部の中世層は厚さ約15cmで固くしまった赤褐色土層である〔第4図⑥層・図版Ⅻ-1Ⅲ層上〕。遺物包含度が比較的少なく，土器片・瓦片のほかは貨銭の出土がみられる。部分的にこの層の上に灰褐色の近世層がある〔第4図③・④・⑤層，図版Ⅻ-1Ⅳ層〕。中間部の褐色土層は平安時代の土器片・瓦片を包含する層で厚さ約50cm，部分的には3層に分けられる〔第4図⑦・⑧・⑨層，図版Ⅻ-1Ⅲ層下・Ⅱ層〕。最下にみられる厚さ約40cmの黒色砂質土層は，ここではほとんど遺物を包含していない〔第4図⑩層〕。しかし周辺の調査地点の層位と包含遺物から推して奈良時代層と断定してよい。西へ向かって次第に深くなり粘土質に変化しているのは，西側に滞水凹地があったことを示している。

白川系黄砂層は全面にわたって約80～120cmの厚い堆積をみせている〔第4図⑩層〕。弥生時代より新しく奈良時代より古いこの白川系の流れは，かなり川幅が広がったようであり，氾濫原も拡がっていたようである。

黄砂層下には先史時代の各層がある。砂層直下の薄い黒褐色土層は部分的であるが先史第1層で弥生式土器と晩期縄文式土器の各小片が僅かにみられる。その下方に縄文期の2つの堆積層があり，上部の先史第2層は黄褐色〔第4図⑫層〕，下部の先史第3層は暗褐色〔第4図⑬層〕を呈しており，どちらも粘質の土層である。部分的には複雑な堆積状態を示しているが，これは地山の凹凸の激しさによるものと考えられる。ともに後期縄文式土器および石器が包含されており，先史第3層下面で配石遺構および甕棺が発見された。先史第2・3層の土器群はローリング磨滅痕が少ない。破片も大きく，また近距離で採集されたものが互いに接合でき，このことからみて原位置をそれほど遠く動いていないものと思われる。したがって遺構が廃棄

されたあとの自然の流れにより微低地に溜まったようである。部分的に黒褐色粘質土の先史第4層があり、先史第3層とはほぼ時を同じくして順次堆積したものと思われる。

これらの先史時代各層の下方は、前述の高野川系砂礫層と白川系砂礫層とが互層になって続き、文化層はないと判断しうる。

縄文時代人の住んだ地表の下方砂礫層は非常に凹凸が激しく、縄文遺物を包含する堆積は、この凹地に多く集積しているようである。調査地域の西端は砂礫層が急に高くなっており、一時期の中洲状の微高地と理解できる。縄文時代遺物の包含層はこの高い部分には堆積していない。したがって縄文遺跡は、その多くが北から東、さらに南にかけて広がっていると推定される。

Ⅲ 遺 構〔第2図・第3図〕

遺構が顕著に発見されたのは、歴史時代においては平安時代遺構、先史時代においては縄文時代遺構である。

(1) 平安時代の遺構〔第2図，図版Ⅺ-2〕

平安時代の遺物包含層は大きく2層に分かれ、上層は平安時代末期、下層は平安時代後期の遺物を主体としている。この下層上面に遺構が検出される。真北グリッドに対し約10度東へ振った方向を南北とし、これに直交または平行する幾筋かの溝状遺構である。溝は幅25cm～35cm、深さ5cm～20cmで、1条あるいは平行する2条の溝が単位となっている。溝で区画される内部および外部には特別な施設は見当たらない。溝も上部が後の整地で削平されており、溝が検出できない部分もある。溝内の堆積の大部分が白砂であることからみると、溝水は静かな流れで東から西へ、北から南へ流れていたものと思える。周辺の調査で平安時代の瓦や土器が多量に発見されているところから、この地域で同時代の建造物の遺構が発見される可能性を考えていた。しかし溝状遺構の周辺には、柱穴も礎石も基壇状の高まりも検出されず、瓦類の出土すら非常に少ないものであった。あるいは後世の整地の際に溝の上部とともに削平されたかも知れないが、建造物の存在した可能性はきわめて薄い。ただ溝が非常に整然と統一された方向性をもって走っているだけである。伴出する土器・瓦類にこの溝の性格を明らかにしうる特徴的なものがみあたらない。したがって、これらの溝がどのような施設であったかは

判然としない。発掘区域の南に設けたテストピットの中で同様の溝状遺構の一部が発見されており、その溝内から栗栖野瓦窯系の軒丸瓦が一片出土している〔KU7010〕。平安時代前半の瓦であるが、溝との関連性がどの程度あるかは疑問である。しかしこの瓦と同范のものが平安宮跡から出土しており、また農学部総合館北棟建設予定地からも発見されていることから、依然として平安時代遺構の謎は不解である。

(2) 縄文時代の遺構〔第3図，図版XVI・XVII〕

白川の運んだ厚い黄色砂層を掘りぬくと黒褐色の薄い粘質土層にあたる。現在この砂層と粘質土層との間が地下水位となっている。おそらく砂層の堆積が始まったと同時に地下水は粘質土の土をベースにこの水位を保ち始め現在に至ったと考えられる。これは先史層の調査にとっては非常に悪条件であったが、一方この地下水のため有機物とくに植物遺体が良好に保存されることになった。

砂層下面から黒褐色土内にかけて流木・立木・倒木および木の葉・木の実類、さらに昆虫などの動物遺体まで多量に検出された。これは縄文時代の人間の生活環境を復元する資料としては、大変重要なものであろう。

先史第2層は黄褐色粘土層で後期縄文式土器および石器が発見された。遺物の包含度は比較的少ない。この層の下面では南地区のa-1・a-2，b-1・b-2，c-1・c-2区に集中して不定形な土壙状のピット群が検出された〔図版XVI-1〕。これらのピットは、おおむね円形ないし楕円形を呈していて順次重なって掘られたため、最終的には不定形を呈していると考えられる。円形のもので径約60～80cm，楕円形のもので長径約80～100cm，短径約40～60cmの大きさである。ピット群は環状にめぐっており、全体として一つのロケーションをもつような感がある。それぞれのピットの中には土器を伴出するものと、伴出しないものがある。伴出していると思えるものも流れ込んだ可能性が強い。その性格はまったく不明であるが、土壙墓か否かという点に関してはピット内の堆積土の分析結果をまちたい。

これらピット群が検出された南半区を除く北半区はまったく凹凸のない平坦面が広がっており、流木や倒木・木の根などが多く発見されている。

先史第3層は暗褐色粘土の20cmばかりの堆積層であり、非常に多くの後期前葉の縄文式土器および石器を包含していた。しかも多量に出土する土器片は、ローリングによる磨滅をほとんど受けておらず、比較的大きな破片が多く、かつまた同一個体の破片が接近したりまとま

って発見された(土器出土量のグリッド別比率は、〔図版Ⅸ〕参照)。このことからこの場所が縄文時代の単なる遺物包含地ではなく、住居址・墓地などの生活遺跡に非常に近いことを想定させた。予想通り先史第3層下面をベースとした配石遺構が8基(うち1基は第3次調査で発見)、単独に埋められた甕が4個、そして地上に据えられていたと思われる甕が2個検出された〔第3図、図版XVI-2・XVII〕。配石遺構は大体等間隔を保って調査地域の南約3分の2の範囲に東南隅を扇の要として弧を描くような状態で分布している。それに対して埋甕群は北3分の1の地区に分布し両者は明確に区域を異にしている。これは非常に特徴的な点の一つである。

8基の配石遺構の形状は、大きくA・B2種のタイプに分けられる。

Aタイプは、Ⅰ号・Ⅱ号・Ⅲ号・Ⅳ号で、人頭大の自然石を20～30個用いてほぼ円形および楕円形に密集させているものである。中には積石状に石を重ねているものもみられ、立体的な構造をもつ。径約1.0～1.3mで大きい。

Bタイプは、Ⅴ号・Ⅵ号・Ⅶ号・Ⅷ号で、人頭大の数個ないし10数個の比較的少ない自然石を用いて不定形に敷きつめたもので、積石状に石を重ねることはなく平面的である。Aタイプに比べて規模は小さく簡素である。

しかしA・B両タイプに共通して構築上の特徴が見られる。それは配石を構築して行く過程である。ある意味をもった場所に最初1個ないし数個の石を据える。次にこの石を取り囲むように石を配してゆく。これの1重のものがBタイプであり、2重にしてさらに上に積み重ねるものがAタイプともいえるのである。石はともに自然石を用いその個々の形状には統一性=選択性は見られない。配石Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶでは石の長辺を連ねたり、面をそろえたり、空間を順序よく埋めることによって配石の輪郭を整えようとした意図のうかがえるものがある。

配石Ⅲでは、中心に据えた石をとり囲む石の置き方が石の小口面を下にして所謂石を立てて並べる手法をとっている。ここには中心石を囲むという意図が顕著に現われている。中心石の置かれている位置を問題にすると同時に、配石の中心部がやや低く落ち込んでいるかの如き状態を示しているものもいくつかある。例えば、配石Ⅰでは中心部の2つの石が互いに中央で接し、その接点が下方にずれている。配石ⅡおよびⅦでは中央部が沈んだように外輪部より低い。この疑問を解くためA・B両タイプから配石ⅠとⅣを代表させて配石下の調査を行なった。その結果配石Ⅰの中心部の直下には、径50cm、深さ30cmの土壌が検出された。土壌の中

からは骨の細片，粗製土器の破片が発見された。

構造的に尋かれる結論は埋納物の存在であり，埋納物の種類が配石の性格を決定するものであろうと思われた。第3次調査の段階ですべての配石の移築作業に先立って残る6基の配石下の調査を行なった。この結果は前2者と同様の土壌が検出されたものは配石Ⅷのみで，他は配石下の施設は発見されなかった。したがって配石構造はすべてが同じであったわけではない。甕を埋納するもの1基(Ⅳ)，土壌を有するもの3基(Ⅰ・Ⅳ・Ⅷ)，骨片が検出されているもの4基(Ⅰ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅷ)，耳飾が発見されているもの1基(Ⅷ)という事実関係から，この配石を「配石墓」と断言してもよいと思われる。加えて配石下の土の分析の結果をまちたい。

北区域に拡がる埋甕群はすべて粗製土器と呼ばれる無文の深鉢である。6個体の甕のうち4個は口縁部を真上ないし斜め上方に向けて頸部まで埋めて据えられていたようである。この4個体は共通して底部が打ち欠かれている。甕Ⅲの内部から骨片が採集されている。

他の2個体は地上に置かれたようであり，1つは胴部から上方口縁部までを残し，他の1つは縦に二つに割った一方が仰向けに据えられていた。東北隅に発見された甕Ⅴは周辺を点々と石で囲まれているようである。しかし配石Ⅳでみられたように直上に石は置かれておらず口縁部は斜め上を向いて地表に露出していたと考えられるので配石の一つとは考えにくい。すべて甕は外面にススの付着がみられるが，底が打ち欠かれていること，住居址や炉址その他の施設が伴わずまったく単独で存在することなどから，煮沸用土器の転用と考えてよい。

これらの埋甕群は，「甕棺」の可能性が考えられる。現に甕Ⅲでは明らかに骨片が数個発見されている。甕の方も内部にあった土の分析が急がれるが，両者が墓とすれば，縄文時代後期前葉の内陸部における埋葬様式としてきわめて注目すべき遺跡であることは明らかである。

両者の接点で次のような状態が観察できた。甕の最南と配石の最北に位置する甕Ⅲと配石Ⅳが東西に接している。ところが甕Ⅲは配石Ⅳと反対の側へ傾斜しており底部のみならず配石側の口縁部から胴部にかけてが大きく欠損している。しかも配石Ⅳの最西端の石は甕の欠損した部分の上におおいかぶさっている。この事実は，甕Ⅲが先に据えられていて，少し埋まった状態の時から配石Ⅳが造られたことを物語っている。もしそうだとするならば，甕群と配石群との造られた時期は僅かに甕群が先であったといえることができる。幸い配石Ⅳで甕が埋納されており，この甕と甕Ⅲとの型式学的比較が可能である。遺物の項で少しふれておいたが，この先後関係を甕の比較の上から理解するのは難しくなさそうである。

配石および甕の間隙を埋めている縄文式土器についてまだ触れていないが、その大部分が縄文後期前葉に編年される。したがって両遺構がこの年代的範囲におさまると考えるのが妥当である。縄文期の埋葬儀礼を考える上でこの遺跡は大変重要な遺構といえる。

配石遺構は東日本・北日本において縄文時代各期にみられるが、本遺跡と形態が類似しているものは非常に少なく、その性格が判明しているものも僅かである。西日本では最近近畿や九州で少々の発見を聞くが、このように数多くの配石がまとまって発見された例は初めてといてよい。しかも後期前葉期の配石遺構は全国的にみても本例がかなり古いものと思われる。北白川扇状地に居住していた縄文人の生活形態を知る最初の明確な遺跡の発見は全国的に注目を集めることであろう。

IV 出土遺物

歴史時代各層出土の遺物と、縄文時代の遺物とそのすべてであるが、この概要においては、縄文式土器片約2万2千片を含む縄文時代遺物について、主に述べることにする。もともと、整理作業の途中であり、複雑かつ膨大な量でもあるため、詳細は本報告にゆずらねばならない。その一部を抽出して紹介するにとどめる。

(1) 歴史時代の遺物

①中世層出土の土器

発掘調査の際、仮りに第Ⅲ層上としてとらえた暗褐色砂質土から、「永楽通宝」の出土をみた。中世層で、この層に包含される土器片は、すべて細片である。器種は、土師器の甕・灯明皿で、後者が多い。土鼎の脚部は、先細りの円脚である。磁器片が少々出土しており、青磁釉のかかったオロシ器もみられる。

②中世層出土の瓦

布目瓦片が少量出土している。文様瓦はない。

③中世層出土の貨銭

「永楽通宝」1枚〔図版XIV-2〕。

④平安層出土の土器

平安層は、仮りに第Ⅲ層下・第Ⅱ層としてとえられた灰褐色砂質土層と、赤褐色砂質土層

である。第Ⅲ層下は、瓦器質の土鍋が特徴的である。ほかに青磁片と土師器の甕・皿・碗・蓋などの器種がみられるが、小片で復元不可能である。

第Ⅱ層には須恵器の甕・皿，土師器の皿・灯明皿，瓦器の土鼎がみられる。灯明皿は農学部周辺調査の際「延喜通宝」と伴出した灯明皿の型式に属するものを時期的な上限とし，それより後出の型式のものも多く混在する。鼎脚は太く先は退化した獣足状に踏んばる。他に滑石製の石鍋の破片が2個出土している。

⑤ 平安層出土の瓦

テストピット内溝状遺構内から栗栖野瓦窯系の軒丸瓦〔KU7010〕が出土している〔図版ⅩⅠ-1〕。これは農学部総合館建設地の調査で平安層から出土しており，おそらく同范と思われる。平安時代の前期のもので平安宮跡などから出土例が知られている。

調査地域内の平安層からは下方第Ⅲ層より軒丸瓦2個が出土している。ともに複弁蓮華文様の退化したもので，小型の瓦である〔KU7185・KU7195〕〔図版ⅩⅠ-2〕。第Ⅲ層下出土の瓦は三巴文軒丸瓦片〔KU7321〕と斜格子文軒平瓦片〔KU7870〕でともに平安末期～鎌倉初期のものと思われる〔図版ⅩⅠ-2〕。

⑥ 平安層出土の貨銭

5枚出土しているが，すべて中国北宋の貨銭である。第Ⅲ層下出土の貨銭は「皇宋通宝」「熈寧元宝」「元豊通宝」，第Ⅱ層出土は「天聖元宝」「明道元宝」の各1枚ずつである〔図版ⅩⅣ-2〕。

⑦ 平安層出土の緑釉陶器・磁器

緑釉陶器は底部1片が第Ⅲ層下から出土。高台の復元直径は10cm。器形は浅い皿であろうと思われる。胎土はやや軟質で，外が黄白色，内側が灰色を呈する。釉は濃黄緑色である〔図版ⅩⅠ-2〕。

磁器は24片出土。第Ⅱ層と第Ⅲ層下に包含される。大部分は碗・鉢の類と思われるが，他に壺の把手と考えられる1片と，水注の注口片が1片ある。胎土で5種に分類できる。いわゆる珠光青磁碗・片切彫牡丹文碗・蓮弁文碗・鉄足の碗など一般に竜泉窯系青磁と呼ばれているものである〔図版ⅩⅣ-1〕。

(2) 先史時代の遺物

〔土 器〕

弥生式土器と縄文式土器が出土しており，弥生式土器は細片で時期を明確にしえなかった。

弥生式土器と晩期縄文式土器は、砂層直下から層の区別なく出土しており、その他の縄文式土器とは層位で区別しえた。出土した縄文式土器片の総数は約2万2千片で、前期前葉から晩期終末までの時期を含むが、大部分は後期前葉の土器であって、それ以外の時期の土器は全体の1%にも満たない。完形を推定しうるものは数十個体で、他の大部分は細片である。

本概要の分類は、整理作業が中途であり、かつ将来、新型式を設定する必要がある土器群もあるので、大まかな時期による分類にとどめ、一時期内の分類は主に器形によっておこなった。

①前期前葉の土器

非常に磨滅した土器で、表裏にアルカ属貝背面による条痕がみられ、表面にC字爪形を施す薄手の土器。北白川下層Ⅰ式に相当する。第3次調査で1片発見された。図版には掲載していない。

②前期末の土器〔図版Ⅴ-1, XXX-5〕

厚さ4mmで縄文地に貼付けた低い突帯の上に爪形を施した土器で、口縁内面に段状に肥厚した縄文帯を有する。口縁上端にはアルカ属貝殻頂部による圧痕を有する。京大農学部発掘調査の概要〔Ⅰ〕昭和49年(以下農学部概要〔Ⅰ〕と略す。)の第Ⅰ類に相当する。

③中期前葉の土器〔図版Ⅴ-2, XXX-5〕

厚さ7mmで粗い縄文地に直接、中央部がやや窪んだ半截竹管で爪形を弧状に施した土器。口縁内面にも縄文を有する。船元Ⅰ式に併行する土器であろうが定かでない。

④中期中葉の土器〔図版Ⅴ-3・4, XXX-5〕

粗い縄文地に半截竹管で横ないし縦の弧状文を施した土器。農学部概要〔Ⅰ〕の第Ⅲ類に相当し、船元Ⅲ式併行である。

⑤中期末の土器〔図版Ⅴ-5・6, XXX-5〕

農学部概要〔Ⅰ〕の第Ⅳ類B種に相当する土器。陸線で区画し、その中にへら描の綾杉文を施した土器。後期初頭まで下る可能性もあるが、中津式とは異なる。

⑥後期前葉の土器

本遺跡の主体をなす土器群で、中津式・称名寺式を含まない。器形と文様から大きく1~7類に分類した。

第Ⅰ類 無文深鉢形土器〔図版Ⅰ-1~4, Ⅴ-7~9, XXⅦ-1・2, XXⅧ-2, XXXⅠ-1〕

将来的には、器形・器面処理から数種に分類しうる。器形は頸部がくびれる深鉢形（Ⅰ-1・2・4，Ⅴ-7～9）と、くびれない深鉢形（Ⅰ-3）がある。器面処理では、表裏を巻貝で条痕調整し横ナデした土器（Ⅰ-1，甕棺Ⅲ・Ⅰ・Ⅴ），ヘラ削り状の砂粒の動きがみられる調整をし軽く磨いた土器（配石Ⅳの甕棺），幅4～5mmの平滑な工具で磨き状の調整をした土器（甕棺Ⅳ），全面に縄文を施した土器（Ⅰ-3，Ⅴ-7～9），櫛状工具またはヘラ状工具による条線を全面に施した土器（Ⅰ-4）などがある。口縁部を肥厚ないし内彎させた土器（Ⅴ-7～9，配石Ⅳの甕棺）は、京都市北白川小倉町遺跡に類例があり、その他の甕棺と比較して時期のやや下る可能性がある。

第2類 口縁部及び胴部に縄文を有する深鉢形土器〔図版Ⅰ・Ⅱ-5～8，Ⅴ-10～14，XXⅦ-1・3，XXXI-1〕

頸部のくびれた器形が主である。ただし口縁部の縄文帯を省略した土器（Ⅰ-5）や、口縁外面および上端に縄文を有する土器（Ⅴ-14）もこの類にふくめた。一般的に口縁部の肥厚ないし内彎が顕著でなく、胴のはりも弱く全体的になだらかな輪郭を示す。頸部に櫛状工具（Ⅰ-6），ヘラ状工具，棒状工具（Ⅴ-13）などで、縦ないし斜めに文様を描く土器もある。平直な口縁が波状口縁よりもやや多い。Ⅰ-7は胴部のL←R，Rの縄文が縦走向で、Ⅴ-12は胴部のL←r，rの縄文が横走向で共に例外的である。Ⅱ-8は甕棺Ⅵである。

第3類 有文深鉢形土器〔図版Ⅱ・Ⅲ-9～23，Ⅴ～Ⅶ-15～57，XXⅦ-4～7，XXX-1～7，XXXI-2，XXXII-1・2〕

文様と器形から3種に分類した。

A種 頸部のくびれた深鉢形を呈し、文様帯が口縁部・頸部・胴部に分帯している土器〔図版Ⅱ-9～15，Ⅲ-17～22，Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ-15～44〕。外面に肥厚した幅の広い口縁部を有する土器（A1種=Ⅴ-15～17，XXXI-2），上部に肥厚した幅の狭い口縁部を有する土器（A2種=Ⅴ-18・19，Ⅲ-18，XXⅦ-5，XXXI-2），口縁部の幅は前者の間であって、やや内彎した口縁部を有する土器（A3種=Ⅱ-9・10・12～15，Ⅲ-17，Ⅶ-20～37，XXⅦ-4・6・7，XXIX-1・2，XXXI-2，XXXII-1），幅狭く立った口縁部に1条ないし2条の沈線を描き、胴部には縄文地に太い沈線で文様を描いた土器（A4種=Ⅲ-19～22，Ⅶ-38～44，XXIX-4・6，XXXII-1），口縁内に文様帯を

持つ土器（A 5種Ⅱ-11, XXIX-3）の5種類に分類しうる。Ⅱ-22は口縁部文様がA 4種であるが、全面刷毛目状調整を施し、頸部を磨消した土器である。Ⅱ-11は胴部にL←R, Rの縄文が縦に走向する。A 4種は関東地方の堀之内Ⅰ式に類似するが、Ⅱ-19, Ⅱ-22は若干異なる。

B種 頸部文様帯を持たない磨消縄文の深鉢形土器〔図版Ⅱ-16, Ⅱ-23, VII-45~50, XXIX-5・7, XXX-1, XXXI-1・2〕, VII-45は 縄文地に太い沈線で縦の連弧文を描いており、A 4種と同じ作りである。VII-46・47・48は、やや細い沈線で文様を描き、細い縄文を充填した土器で、VII-46は刻目隆帯が縦に走る。Ⅱ-16はVII-45に類似した刺突文と縄文地に沈線の文様とを口縁部に有し、口縁部の作り方はⅡ-9と共通である。Ⅱ-23は無節の縄文地に渦文を描いた口頸部の分帯しない土器で、口縁部内面の段状肥厚はVII-51, VII-56と共通する。VII-45・46は関東地方の堀之内Ⅰ式, VII-47・48は堀之内Ⅱ式に類似する。

C種 A・B種に属さない深鉢形土器を一括した〔図版VII・VII-51~57, XXXI-2〕。器形は、頸部のくびれる形と、くびれない形とがある。沈線ないし条線によって文様を描いている。今後さらに分類する必要がある土器群である。

第4類 無文浅鉢形土器〔図版Ⅲ-24・25, XXXI-2〕

Ⅲ-24は巻貝条痕を表裏に施した土器で、焼成前の穿孔を有する。Ⅲ-25は良好に研磨した赤褐色の鉢形に近い土器である。

第5類 小型鉢形土器

文様と器形から3種に分類した。

A種 丸底で、外反する口頸部を有する土器〔図版Ⅳ-28~33, VII-58・62, XXX-2, XXXI-2〕 第2類・第3類A種と共通の文様構成をなす土器と、無文の土器とがある。VII-58はL←R, Rの縄文を縦と横にころがす羽状縄文を有する土器である。

B種 丸底で、直口の口縁部を有する土器〔図版Ⅳ-34, XXXI-2〕 半截竹管によって口頸部文様帯と胴部文様帯を2分する平行線と斜線を施した土器。

C種 外反する口縁部の上端ないし内面を肥厚させて文様を施した土器〔図版VII 59~62, XXXI-3〕 頸部は原則として無文であるが、頸部に3本沈線による文様を有する土器（VII-59）や、半截竹管による斜線を有する土器（VII-60）もある。

第6類 注口土器〔図版Ⅶ-63, 64, XXXⅡ-1〕

完形を推定しうる土器はない。胴部の破片には縄文地のものと磨いたものがある。注口部は嵌込式でなく胴部とともに作っている。注口部に把手を付けた破片はない。

第7類 以上の類に属さない土器、および器形が明確でない土器を一括した〔図版Ⅲ-26, IV-35~38, Ⅶ-65~71, XXX-3, XXXⅡ-2・4~6〕。

磨消細文を有する土器(Ⅶ-65~67)のうち、Ⅶ-66・67は第3類A種の胴部の可能性もあるが文様や沈線が異っている。櫛状工具で弧状文を描く土器(Ⅶ-68・69)は注口土器・壺形土器の胴部であろう。Ⅶ-70(XXXⅡ-2)は表裏に刷毛目状調整を施す土器で、刷毛目状調整痕はⅢ-22とIV-36にも見る。後2者の裏面は横ナデしており、刷毛目も若干異なる。Ⅶ-71は巻貝の回転施文による擬縄文であり、器形は第2類に類似する。底部は、平底(IV-35~37)が主体で、凹み底も若干ある。IV-38は高台状に底部をはりつけた底で特殊である。網代底(IV-36)は比較的多い。Ⅲ-26は口縁の外縁がやや肥厚し指頭圧痕列を有する土器で、器形は晩期の土器に類似するが、出土層位からこの時期の土器と考えた。

⑦晩期末の土器〔図版Ⅲ-27, XXX-4〕

二枚貝の条痕を施し、さらに胴中央部以下を削った土器で、内面は丁寧に横ナデしている。口縁直下に1条の刻目突帯を有し、口縁上端にも刻目を施している。

本遺跡はほぼ後期前葉の単純遺跡といえる。後期前葉の第3類A4種ならびにB種の一部は、関東地方の堀之内Ⅰ・Ⅱ式に相当するが、本遺跡においては層位的には区別しえなかった。その他の土器も若干の時間差はありえても、1型式内で考えうらと思う。本遺跡からは中津式・称名寺式は出土しておらず、一方京大農学部遺跡からは中津式併行の土器が出土しているので、堀之内Ⅰ・Ⅱ式と、いわゆる縁帯文土器は共存するものとする。瀬戸内海地方との関係は、図版Ⅶ-59が大府府堺市四ツ池遺跡出土土器と類似することから、福田KⅡ式・津雲A式に併行すると考える。また京都市北白川小倉町遺跡からは、堀之内Ⅱ式の新しい時期の土器と加曾利B式の古い時期の土器とが出土しており、またそれらと伴出した他の土器も本遺跡の土器群と若干異っている。この北白川扇状地においては、中期後半以降は、農学部概要〔Ⅰ〕第4類(船元Ⅳ式併行)→農学部概要〔Ⅰ〕第5類(里木Ⅱ式併行)→1956年京大農学部採集

土器群→農学部概要〔Ⅰ〕第6類(中期末,後期初頭)→本遺跡後期前葉の土器→北白川上層式と編年しうる。

〔土製品〕

耳栓形耳飾〔図版 XXXIII - 7〕

5点出土している。いずれも白形で、中軸に小孔がある。文様はなく一部に赤色顔料(辰砂)が残存しており、その状態から全面に塗布されていたと考える。

2点はともに、厚さ2.0cm、端部径2.9cm、中央部径2.3cmである。他の3点は前者よりやや小型であり、残存状態の良い2点はともに、厚さ1.8cm、端部径2.1cm、中央部径1.8cmで、1点は破損が甚しく、中央部径1.9cmを計る。

大型の1点は配石Ⅵの直下、他の1点は配石Ⅰの付近から出土している。小型は残存状態の良い2点がB-4区、他の1点が配石Ⅴの付近から出土している。

形態と出土位置から推定すると、大型の2点とB-4区出土の小型の2点が、ともに対をなす可能性がある。

本遺跡において後期前葉の時期に耳栓形耳飾が出土したことは、近畿地方以西における耳栓形耳飾の上限を示すと考える。

〔石器〕

本遺跡から出土した石器は、石鏃・石匙・石錐・不定形削器・磨製石斧・切目石錘・砥石・磨石・敲石などである。その他に多量の剝片と石核が出土している。

①石鏃〔図版 XXXIV - 1〕

30点以上出土しており、凹基式・平基式・凸基式がある。石材はすべてサヌカイトである。凹基式は25点あり、基部がふくらむ形のもの、ふくらまない形のものがある。平基式は4点ある。すべて作りが粗雑で未成品の可能性がある。凸基式は1点あり、作りは丁寧である。石鏃の大きさは、1.5cmから2.5cmのものが大部分を占める。重量は、平基式の3点が2.5gから3.5gでやや重く、他はほとんど1g前後である。大きさと作りの丁寧さとは対応しない。

②切目石錘〔図版 XXXIV - 2〕

14点出土しており、すべて渡辺誠のいう切目石錘A種である。ほぼ完形である10点のうち、最も重いものは118gで、最も軽いものは18gである。70g以上のものが4点、40

g 以下のもの 3 点である。切目は、軟かい礫の長辺両端部を両面から擦り込んでつける。大きさや形によって、両面からつけた切目の接点を、さらに擦り込んだ二工程と、両面から一工程で切目をつける例とがある。一端に 2 条の切目をつけたものも 1 例ある。

③磨製石斧〔図版 XXXV - 5〕

3 点出土しており、2 点は定角式石斧、1 点は乳棒状石斧である。定角式石斧の 1 点は変成岩製で刃部の破片である。他の 1 点は硬質砂岩的な石材で刃部を欠失する。残存部は、最大幅 6.5 cm、最大の厚さ 2.5 cm、残存長 7.9 cm である。乳棒状石斧は硬質砂岩的な石材で、刃部を欠失する。残存部は、最大径 5.3 cm、残存長 10.7 cm である。

④石匙〔図版 XXXV - 2〕

3 点出土しており、縦型と横型がある。石材はすべてサヌカイトである。縦型は 1 点であり、5.4 cm × 2.3 cm、8 g の大型である。横型は 2 点で、いずれも 1 g 以下の小型である。

⑤不定形削器

2 点出土しており、石材はすべてサヌカイトである。1 点は、長さ 2.6 cm の細長い剝片の長辺に刃をつけたもので、他の 1 点は半径 2.5 cm の 8 分の 1 円の扇状剝片の長辺から短辺にかけて刃をつけたものである。

⑥石錐〔図版 XXXV - 1〕

棒状の石錐が 3 点出土している。石材はすべてサヌカイトである。長さはそれぞれ 3.9 cm、2.9 cm、2.6 cm である。

⑦敲石〔図版 XXXV - 6・7〕

4 点出土しており、敲打痕を円礫の扁平な面に有するものと、側面に帯状に有するものがある。前者は東テストピット出土の 1 点で、砂岩製である。片面に長軸の端から約 3 分の 1 の所に敲打痕がある。重量は 835 g である。表面を磨き、両端を打ち欠いてあり、磨石を転用したものであると考える。後者は 3 点出土している。1 点は砂岩製で、側面にそって 4 個所に敲打痕がある。重量は 825 g である。2 点は花崗岩製で、側面にそって敲打痕がある。重量はそれぞれ 285 g、230 g である。

⑧磨石〔図版 XXXV - 4〕

2 点出土している。石材は砂岩である。1 点は球形に近く、最大径 6.1 cm である。他の 1 点は扁平な磨石の破片である。

㊟砥石〔図版 XXXV - 3〕

3点出土している。石材はいずれも砂岩である。1点は角柱状、他の1点は扁平細長の石材を使用している。残りの1点は使用によって断面が三角形に磨滅している。いずれも両面に使用痕がある。

㊟石核と剝片が接合する例〔図版 XXXV - 6〕

東テストピット及びC-5区から、接合するサヌカイトの石核と剝片が出土している。C-5区からは、サヌカイトの大型の石核及び剝片が出土しており、今後さらに接合する可能性がある。

本遺跡では、B-3区、B-4区付近から土器が多量に出土しているが、石鏃・切目石錘・石匙・不定形削器の分布の中心はこれとほぼ一致する。磨製石斧・石錐・敲石・砥石・磨石は出土数が少なく、明確な分布の傾向は認められない。

本遺跡の石鏃には、農学部総合館遺跡でみられる長さ1cm前後の作りが粗雑なものではなく、1.5cmから2.5cmのものが大部分を占める。作りは比較的丁寧である。切目石錘は農学部総合館遺跡出土品と大きな差はないが、大型の比率が高くなる。本遺跡の時期まで切目石錘の使用が続くことは、北白川小倉町遺跡がより高位の扇状地に立地し、切目石錘が出土しないことと合わせて注目される。不定形削器は農学部総合館遺跡第V類土器に伴う出土品とは異り、両者に系統的な関係はないと考える。チャート製の石器は出土していないが、剝片は出土している。

本遺跡出土の石器は後期前葉の土器に伴い、農学部総合館遺跡の中期末、後期初頭の土器に伴う石器の組成をほぼ継承している。農学部総合館遺跡で出土し、本遺跡で出土していない石器は、打製石斧・石皿・石棒である。この差は本遺跡が埋葬址であることによる可能性もある。耳栓形耳飾の出現や土器組成の変化は、本遺跡の時期に東日本からの影響により、新たな変化が生じたためと考える。

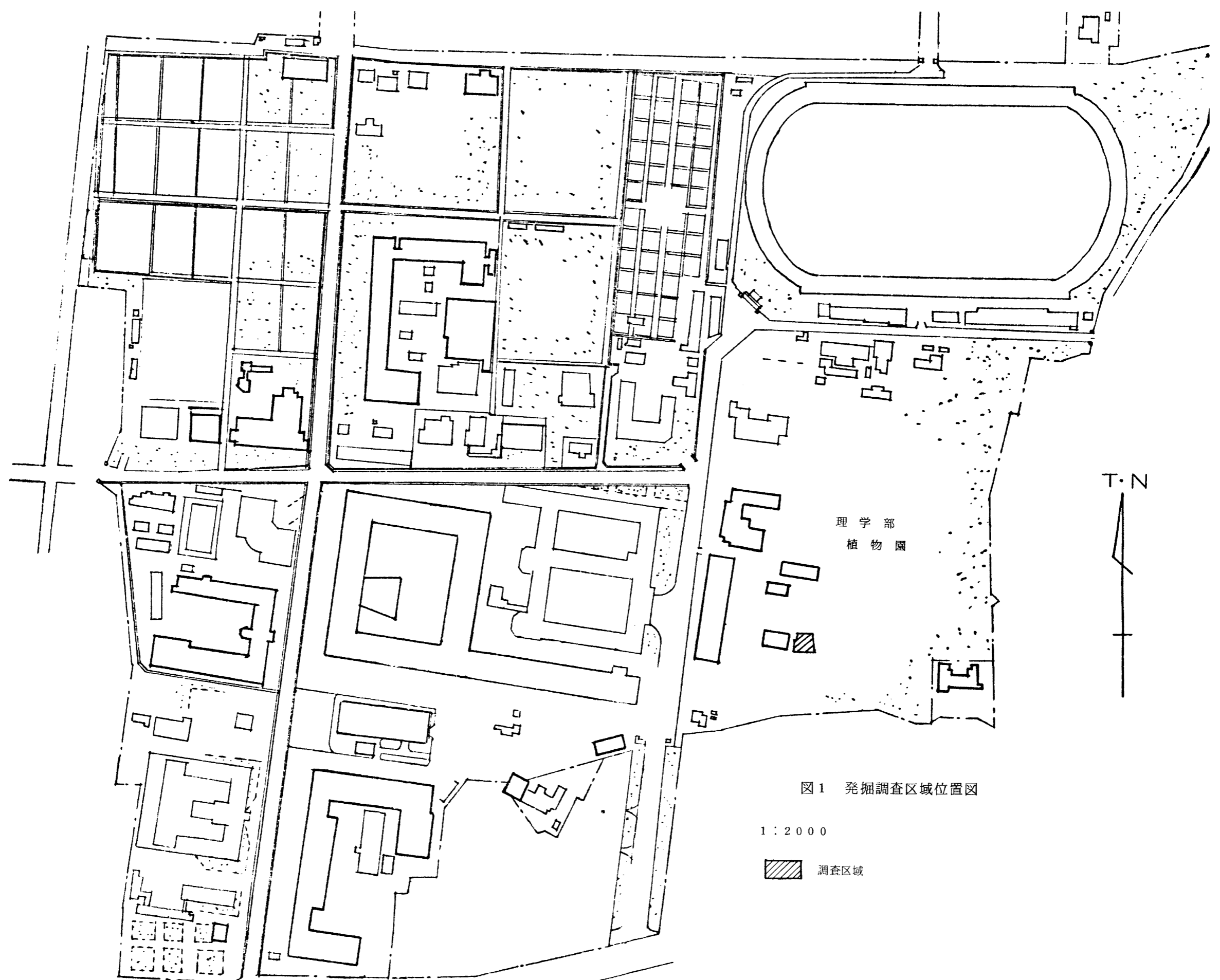
V 結 語

本調査で発見された縄文時代の配石墓および壙棺の遺構は、学術的価値はいうまでもなく埋

蔵文化財としてきわめて価値の高いものである。この地域においてある程度遺構存在の可能性を予知しえたとはいえ、本調査が明らかにした遺構は想像を絶するものであった。縄文時代の遺物は土器だけで2万2千点余にのぼり、移築消滅する遺構への最低限の義務である「記録保存」措置に向けての整理作業と学術報告書の刊行は今後に残された一大事業である。

移築作業もまだ完了した訳ではない。小橋敏夫氏の技術指導のもとに移築作業にとりかかる直前になって氏が急逝された。そのあとをうけての移築作業は困難をきわめた。未熟な技術を駆使してともかくも復元可能な形に取り上げることができたのは、調査に当たった調査員や学生諸氏の献身的な努力と遺跡に対する愛着であった。今後しかるべき場所に移築を完了させ、永久保存と活用の方法を講じたいと念じている。本報告においては遺構移築に関する詳細についても公表する紙面を得て資料に供したい。

圖 面 · 圖 版

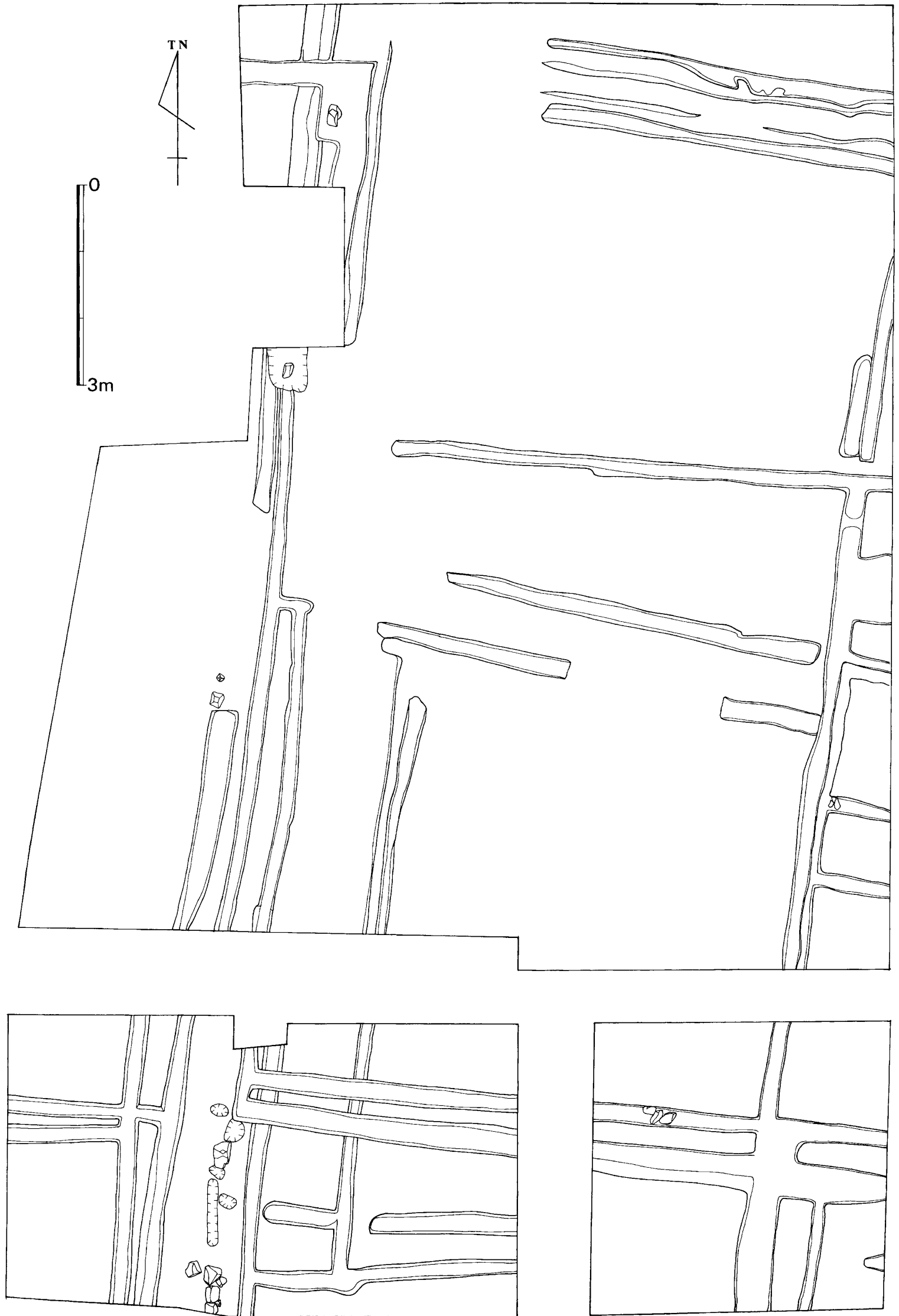


理学部
植物園

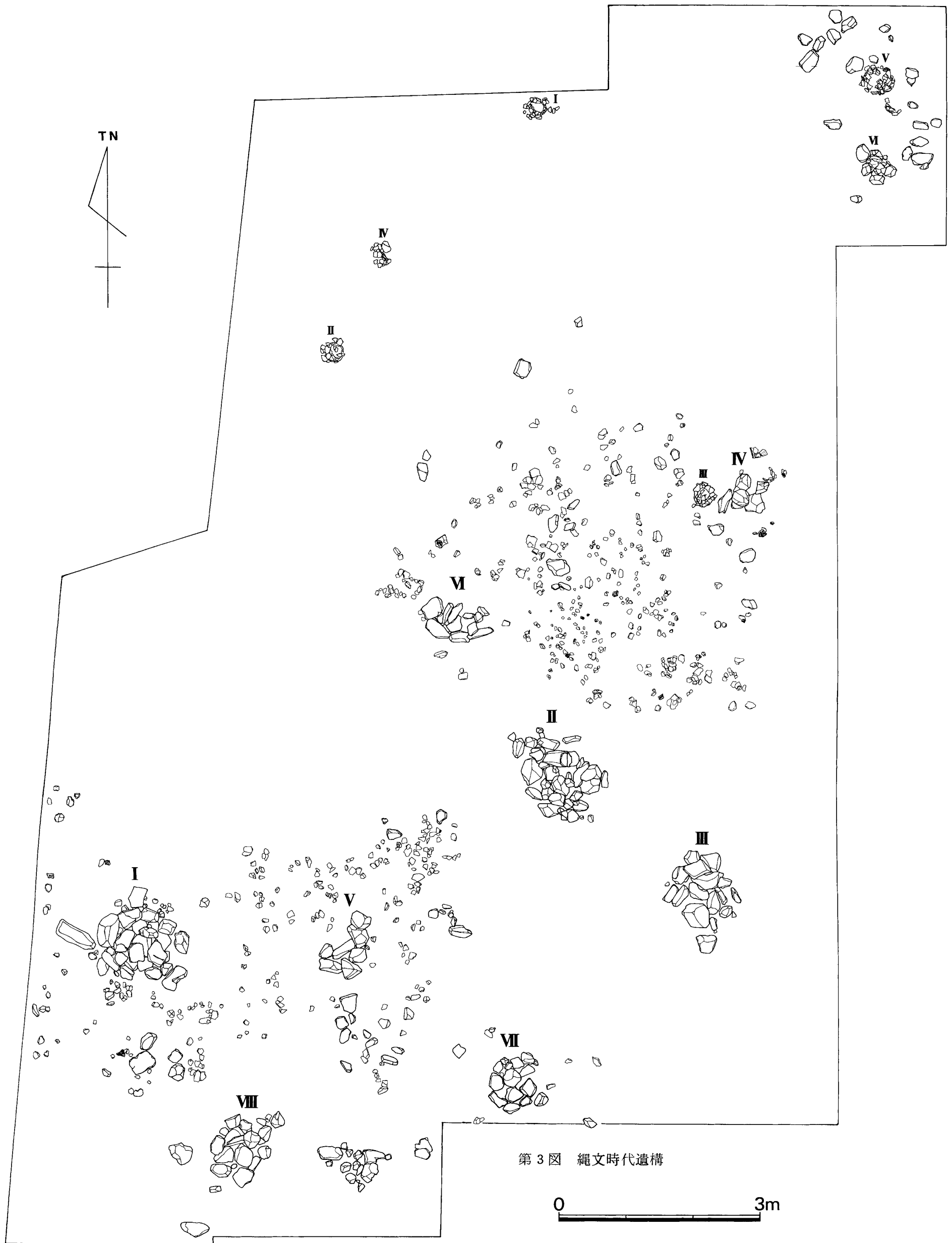
図1 発掘調査区域位置図

1:2000

 調査区域

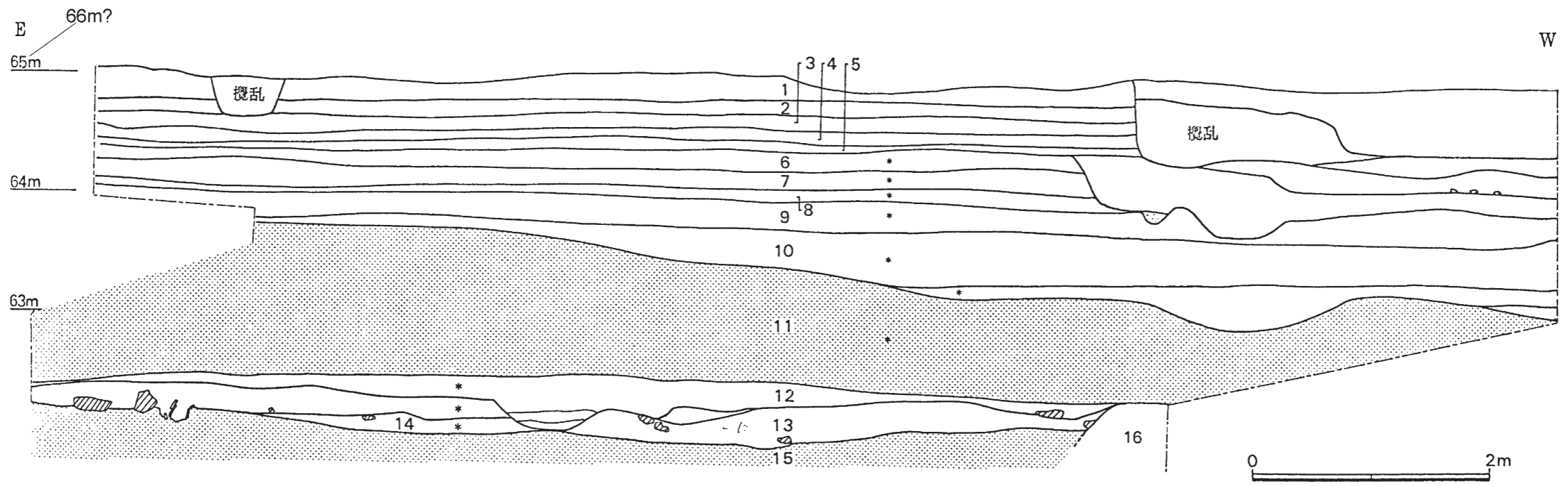


第2図 歴史時代遺構



第3図 縄文時代遺構

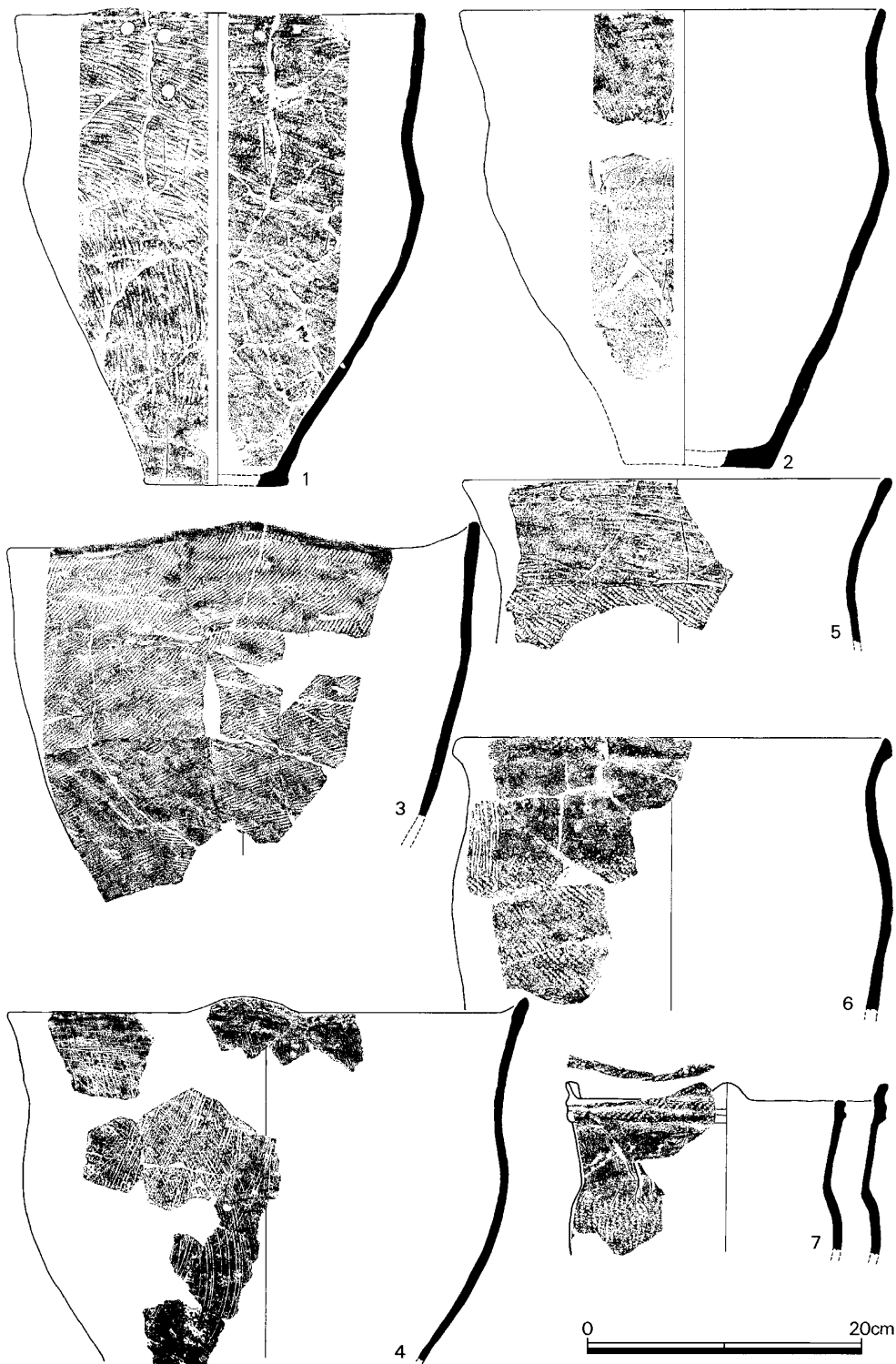


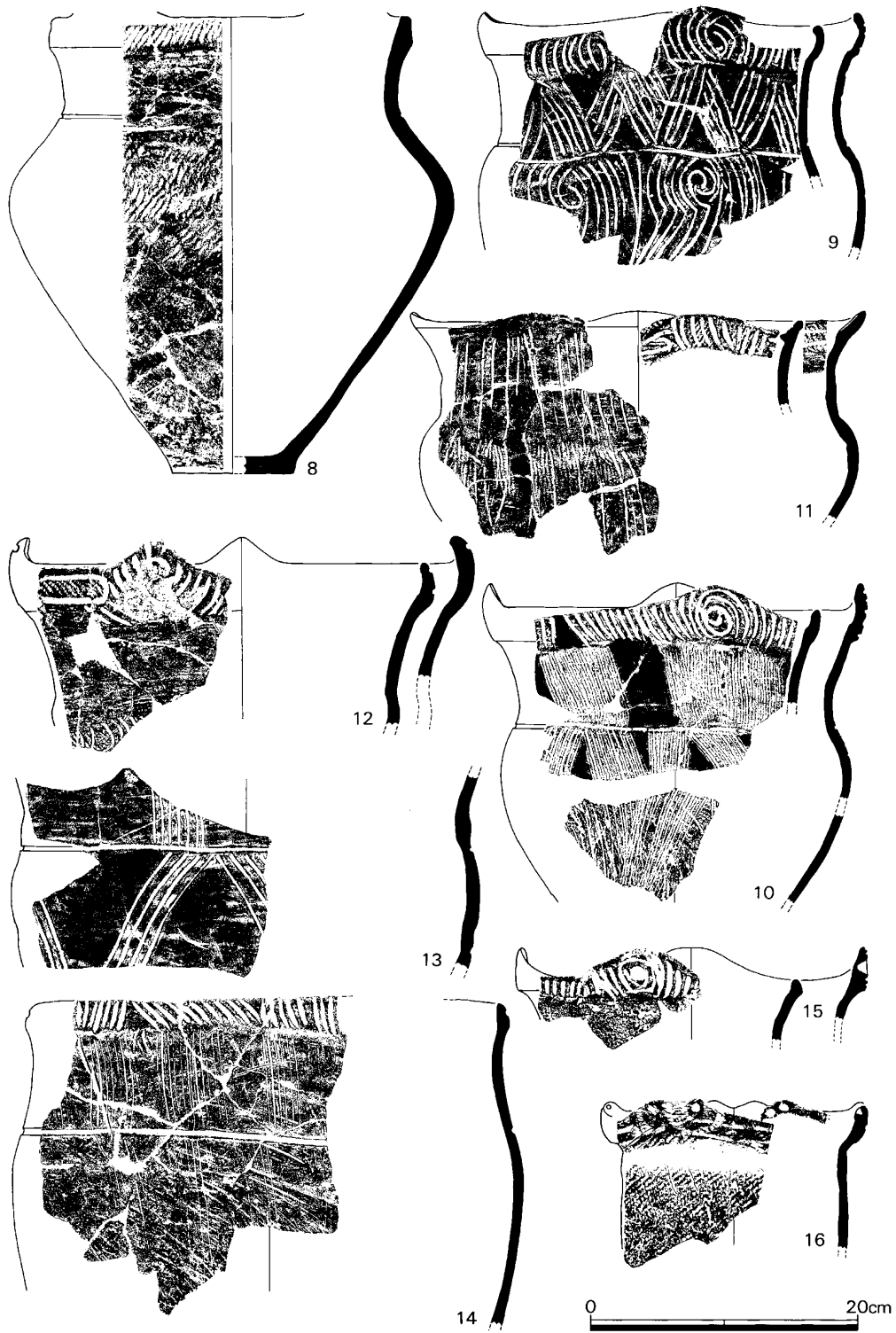


- | | |
|---------------|------------------------|
| 1. 表土層 | 9. 赤褐色土層 (平安) |
| 2. 床土 | 10. 黒色砂層 (奈良) 東方下部黒色粘土 |
| 3. 灰褐色土層 (近世) | 11. 黄色砂層 |
| 4. 赤褐色土層 (近世) | 12. 黄褐色粘出土層 (先史第2層) |
| 5. 褐色土層 (近世) | 13. 暗褐色粘出土層 (先史第3層) |
| 6. 赤褐色土層 (中世) | 14. 黒褐色粘質土層 (先史第4層) |
| 7. 暗褐色土層 (平安) | 15. 青色又は黄色砂層 (地山) |
| 8. 灰褐色土層 (平安) | 16. 赤色酸化鉄付着砂層 (地山) |

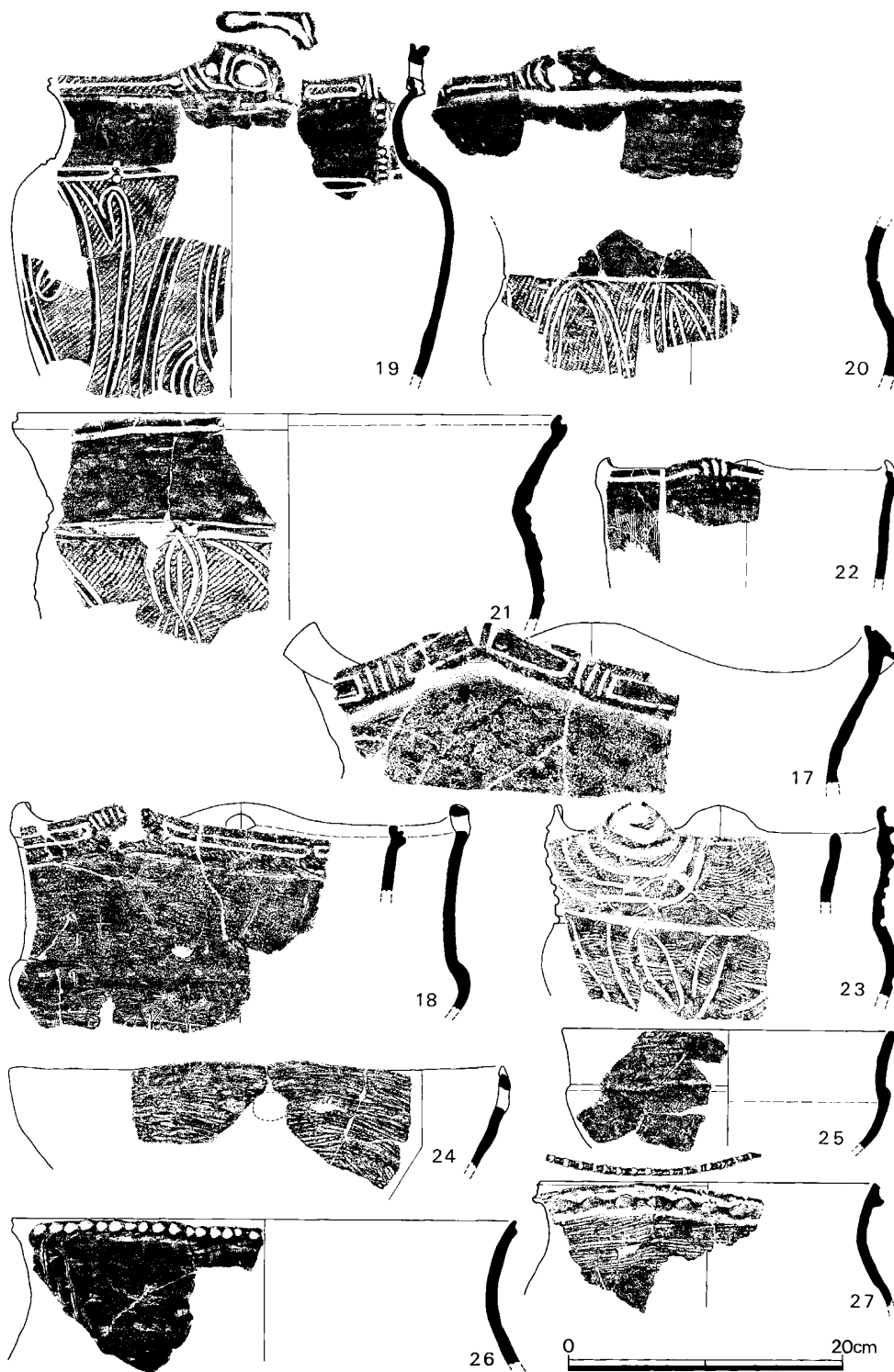
*印 花粉分析用の土採集層

第4図 地層断面図



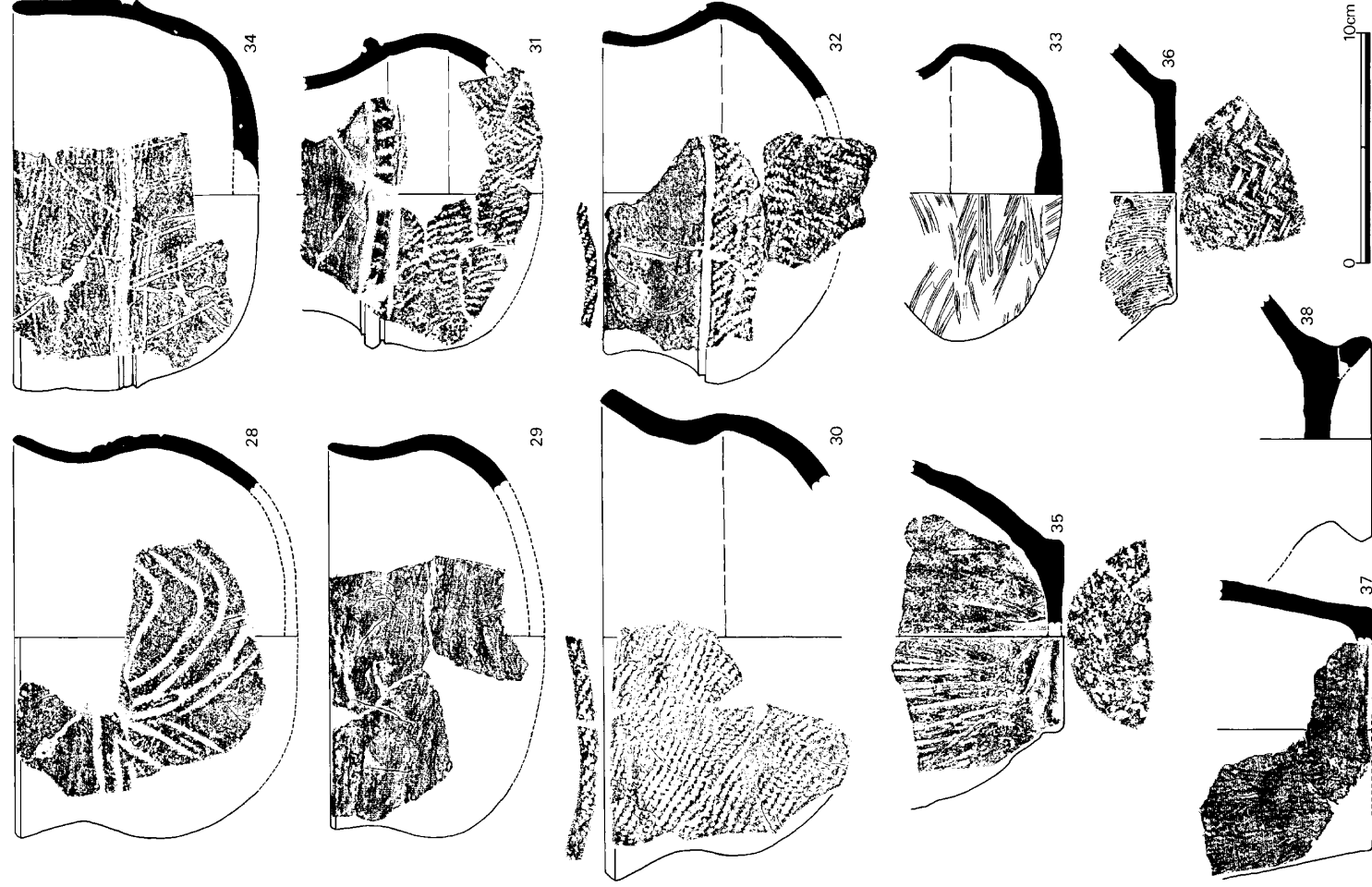


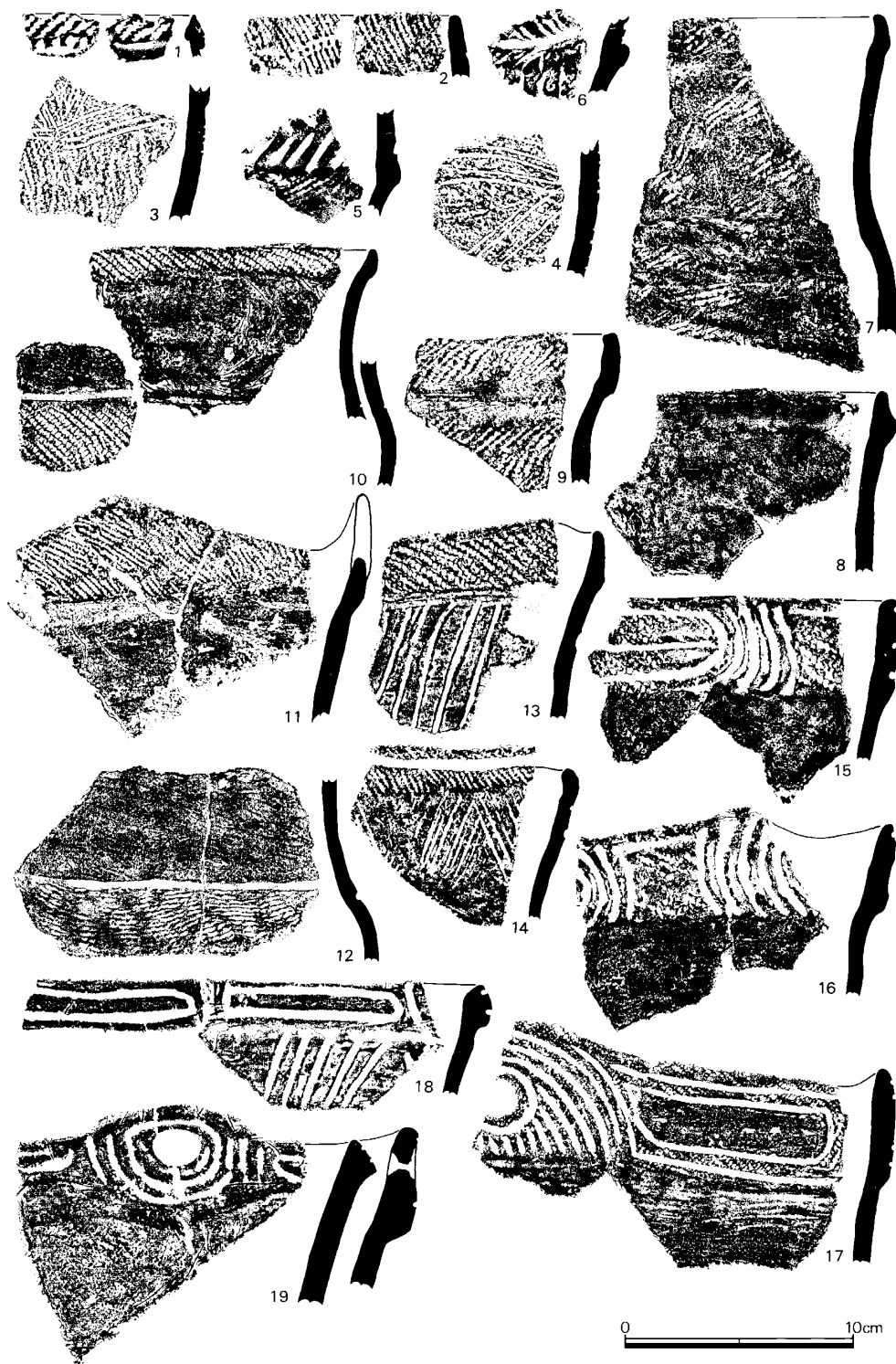
後期前葉 第2類8 第3類(A3種9・10・12~15, A5種11, B種16)



後期前葉 第3類 (A 2種 18, A 3種 17, A 4種 19~22, B種 23) 第4種

図版Ⅳ 縄文式土器実測図





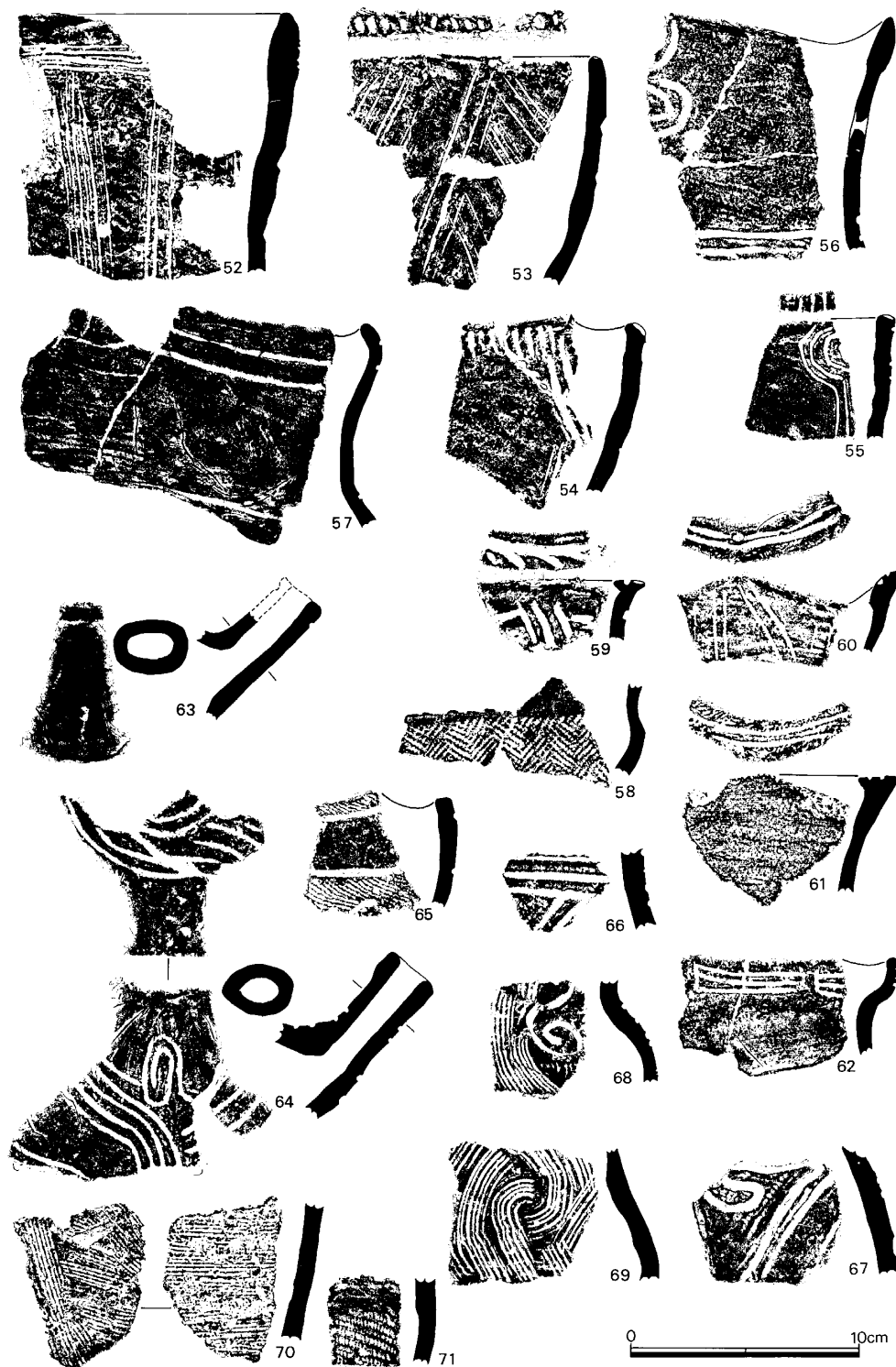
前期末 1 中期前葉 2 中期中葉 3・4 中期末後期初頭 5・6

～9 第2類 10～14 第3類(A1種 15～17, A2種 18・19)





後期前葉 第3類 (A 4種 38~44, B種 45~50, C種 51)



後期前葉 第3類(C種52~57) 第5類(A種58, C種59~61) 第6類
63・64 第7類65~71

	a	b	c	d	小計
1					16.5
					16.5
					14.5
					13.0
					%
2					14.8
					16.8
					13.3
					18.9
					%
3					39.0
					37.1
					35.0
					36.1
					%
4					36.9
					24.6
					33.2
					26.2
					%
5					7.8
					5.0
					4.1
					5.7
					%

土器総数比率 (100% 21938片)
 土器口縁部数比率 (100% 1583片)
 土器底部数比率 (100% 421片)
 有紋土器数比率 (100% 1671片)

グリッド別出土土器比率表



1. 遠景（北西より）



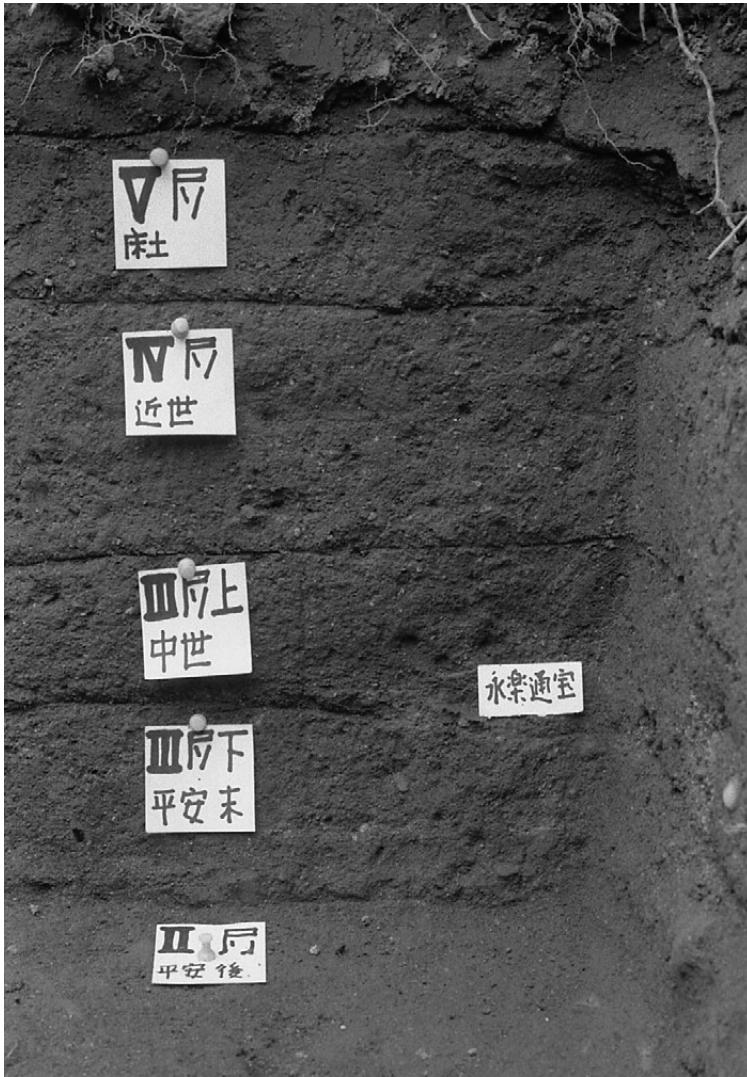
2. 発掘前の状態（南より）



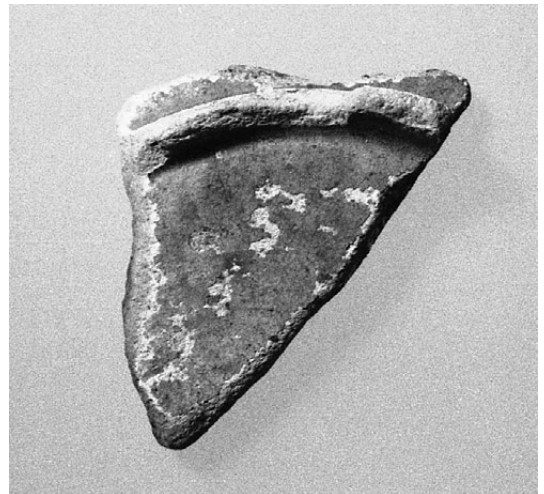
1. 歴史時代遺構発掘終了（南より）



2. 平安時代遺構全景（西南より）



1. 歴史時代層



2. 緑釉陶器片



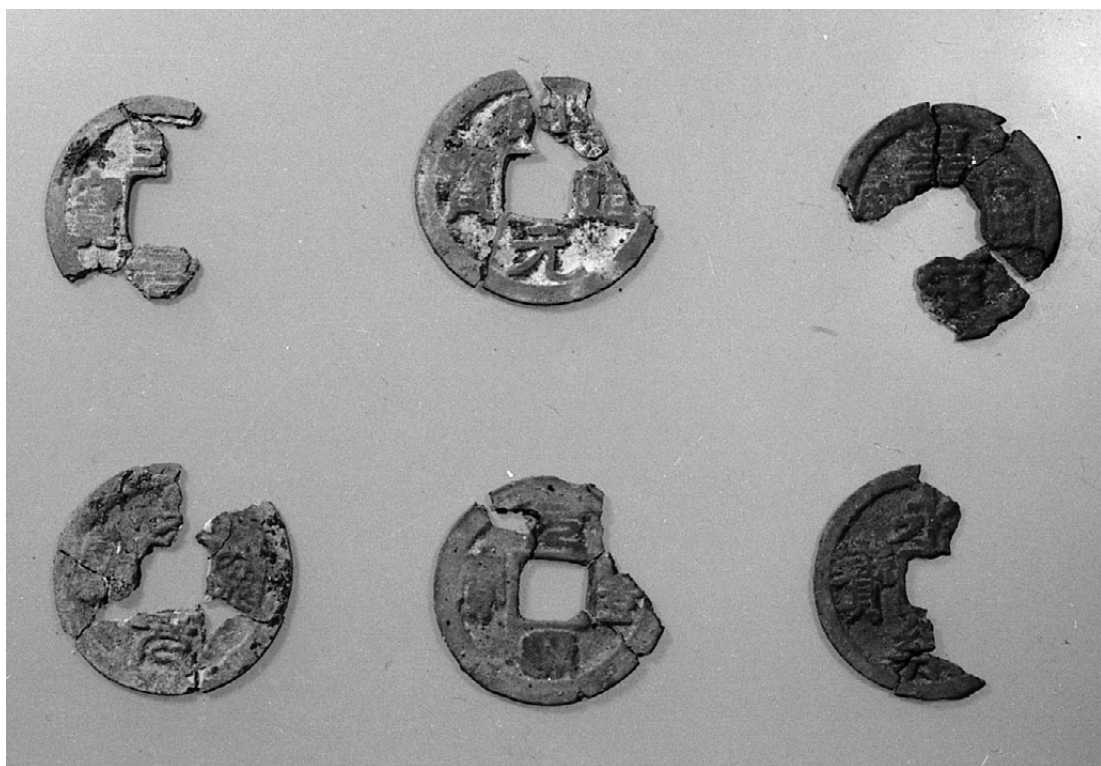
1. 栗栖野瓦窯系軒丸瓦



2. 軒丸瓦・軒平瓦



1. 青磁



2. 宋明銭



1. 層 位



2. 先史第Ⅱ層 流木・倒木



1. 先史第Ⅱ層遺構



2. 先史第Ⅱ層埋甕・配石遺構全景（南より）



縄文時代遺構全景（上空より）



1. 配石 I



2. 配石 I 直下の土壌



1. 配石 II



2. 配石 III



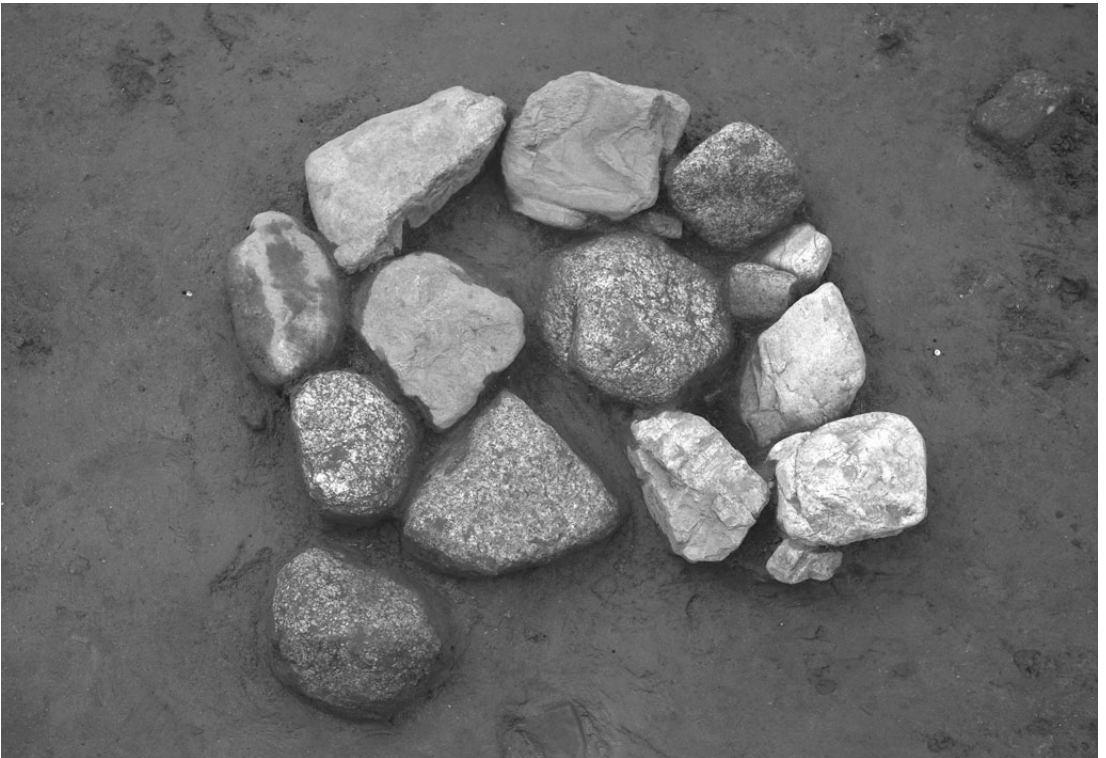
1. 配石 IV



2. 配石 V



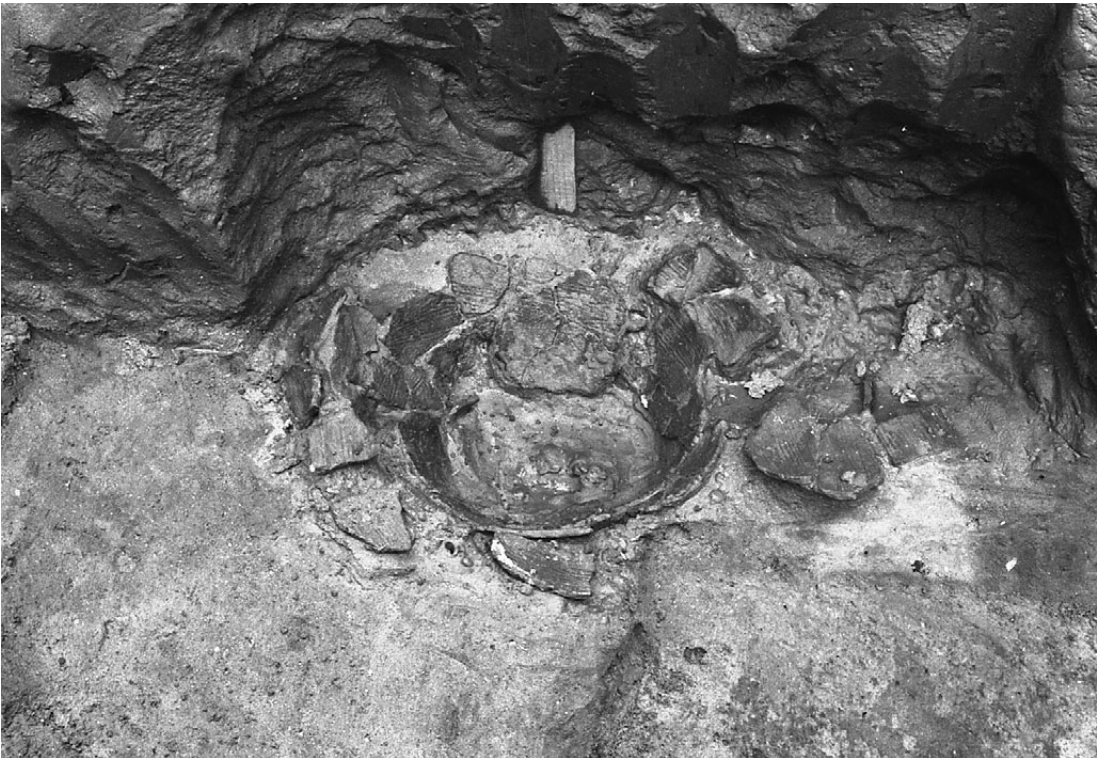
1. 配石 VI



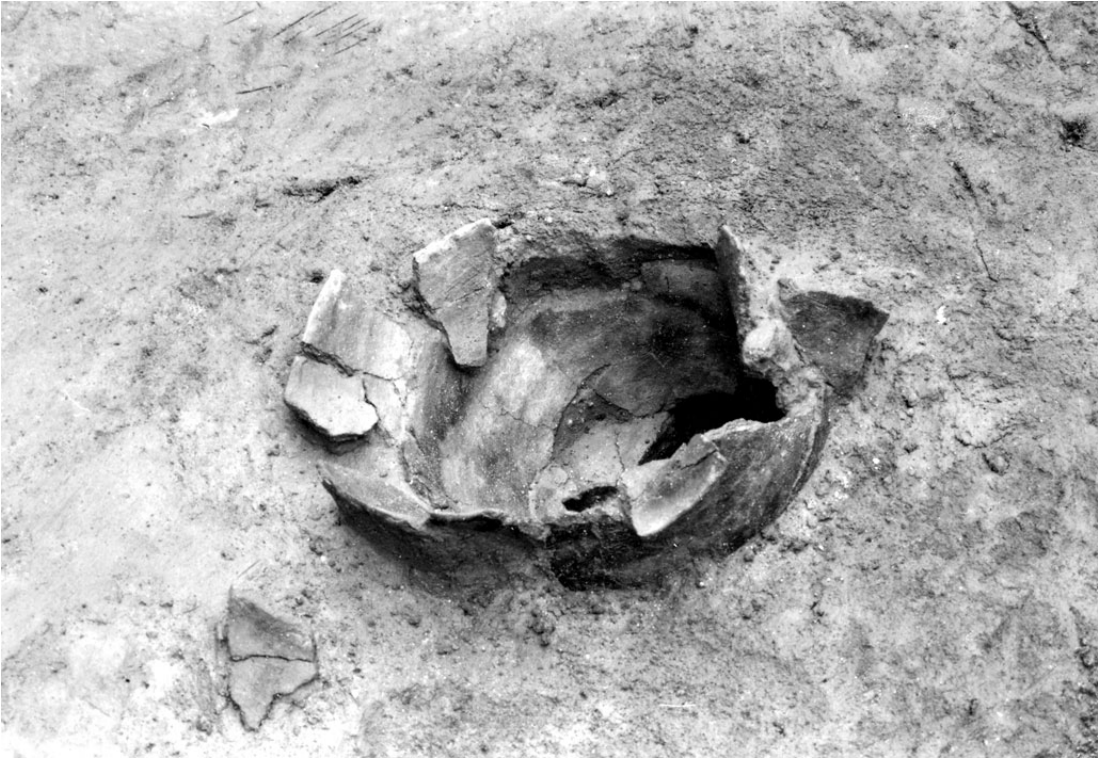
2. 配石 VII



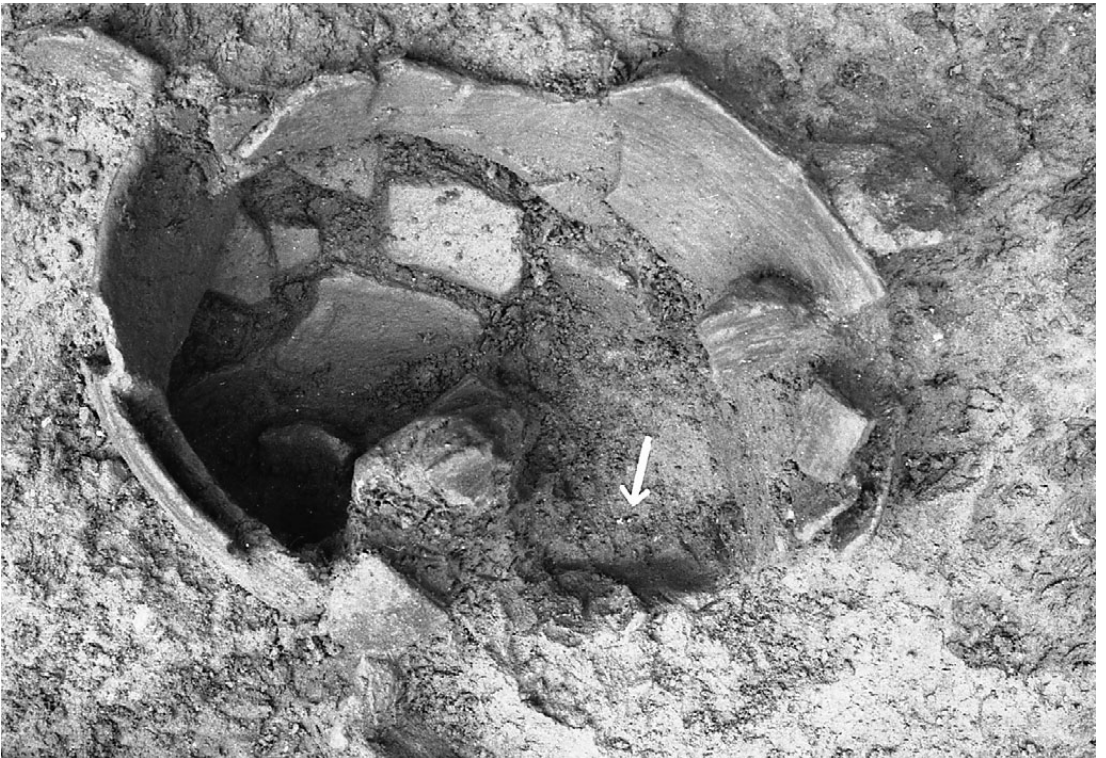
1. 配石 VIII



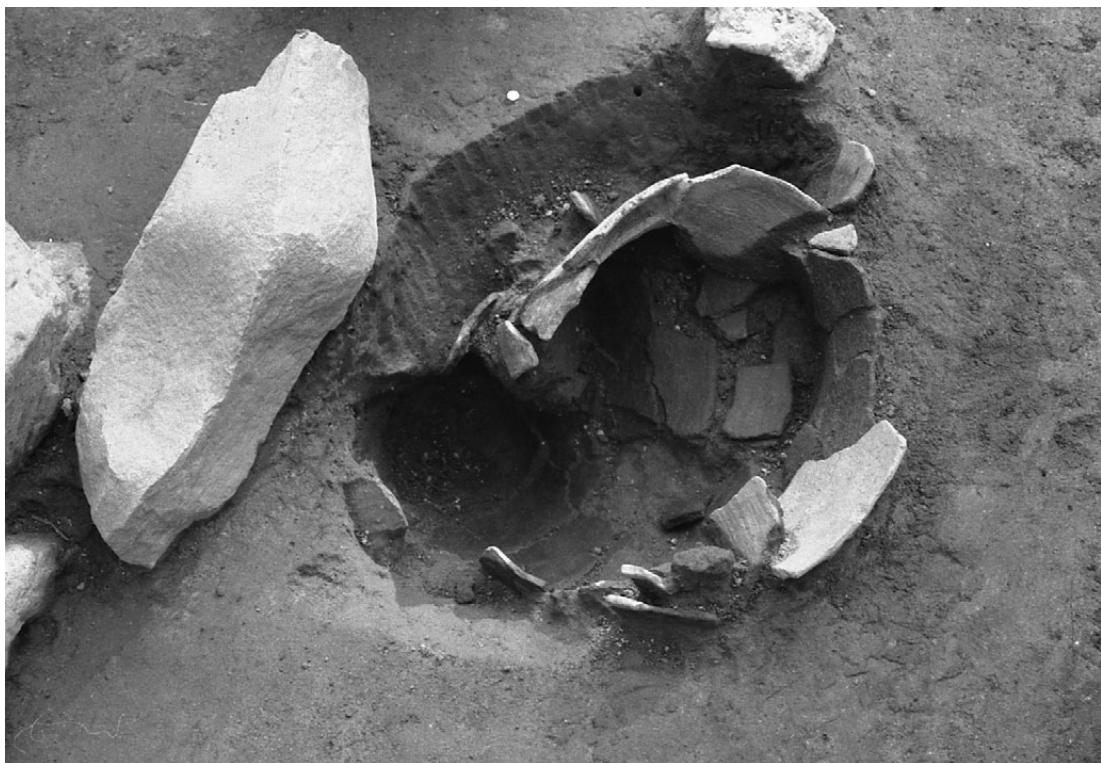
2. 甕棺 I



1. 甕 棺 II



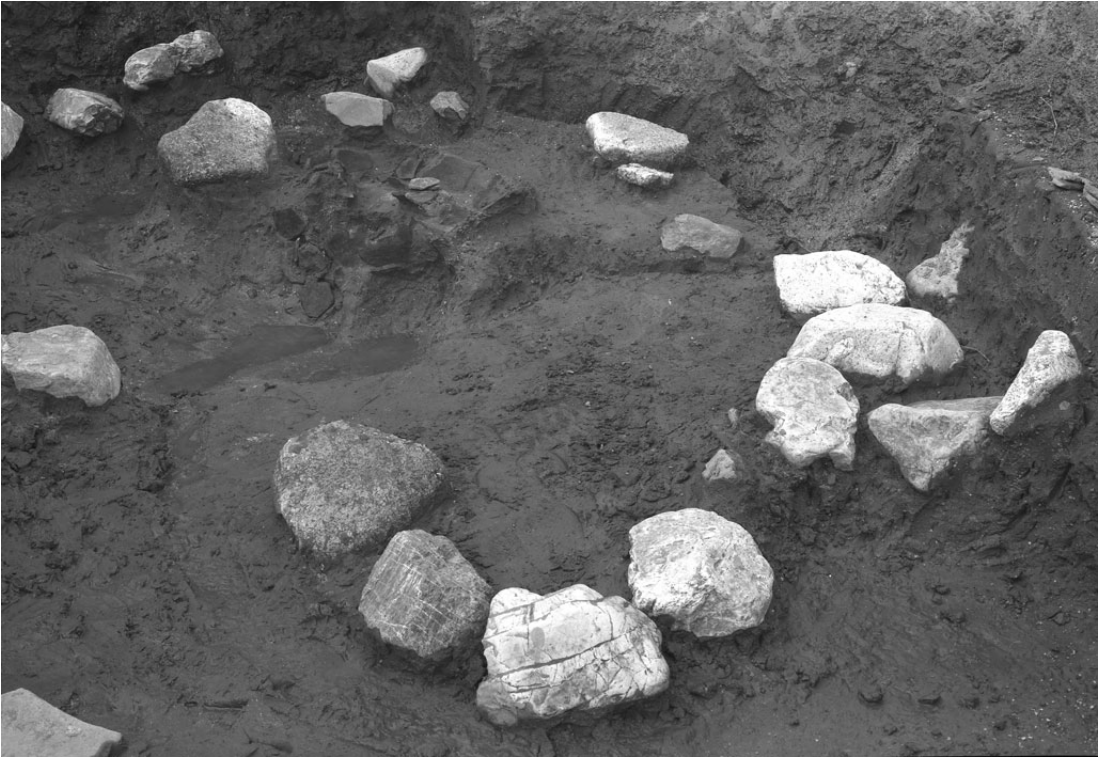
2. 甕棺Ⅲ内骨片出土状態 (矢印)



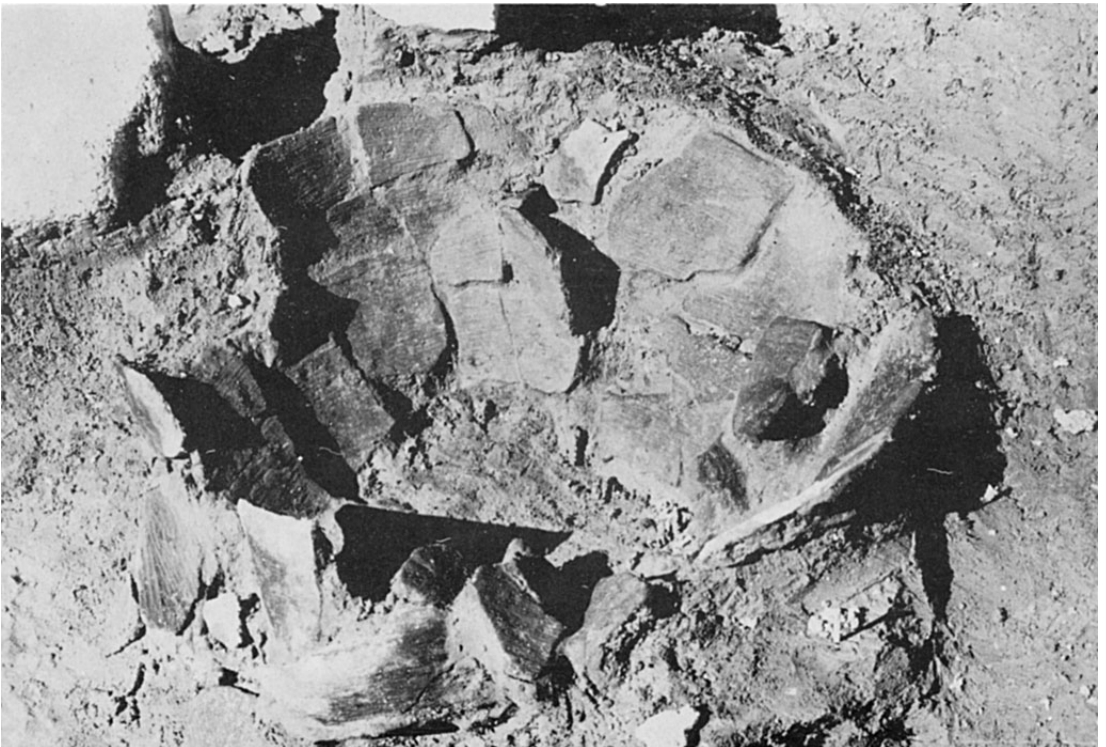
1. 甕棺 III



2. 甕棺 IV



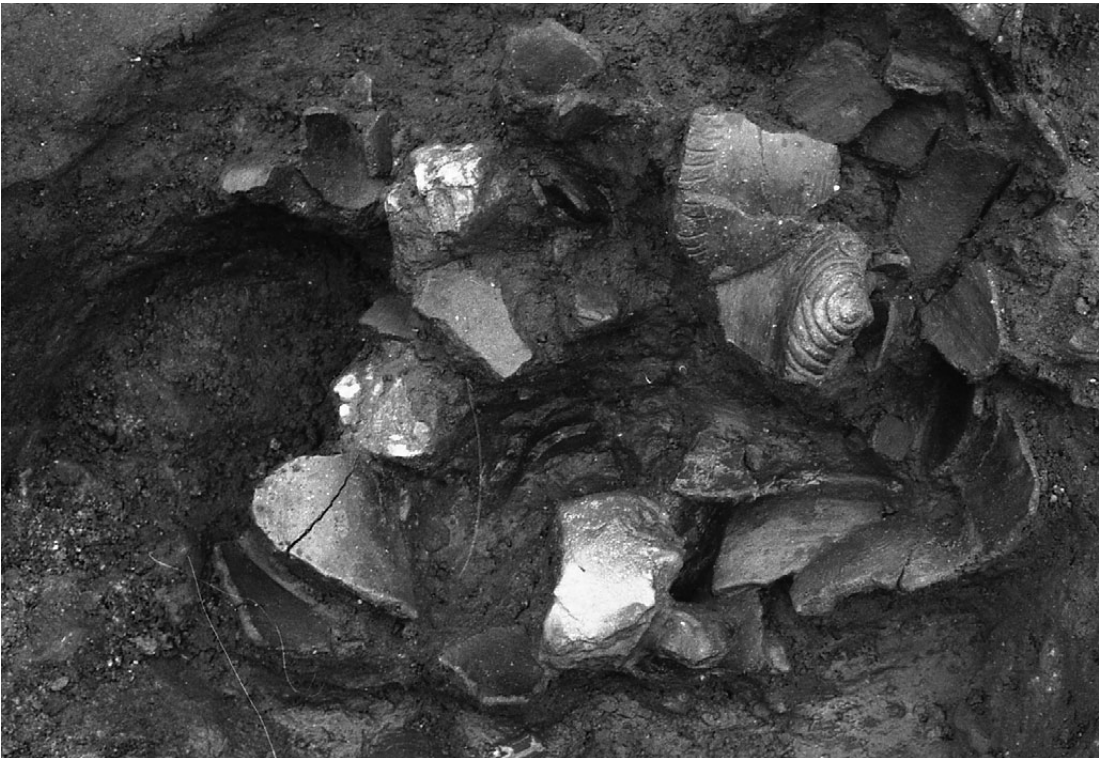
1. 甕棺Vと周辺の石列



2. 甕棺V



1. 先史第Ⅲ層土器出土状態



2. 先史第Ⅲ層土器出土状態

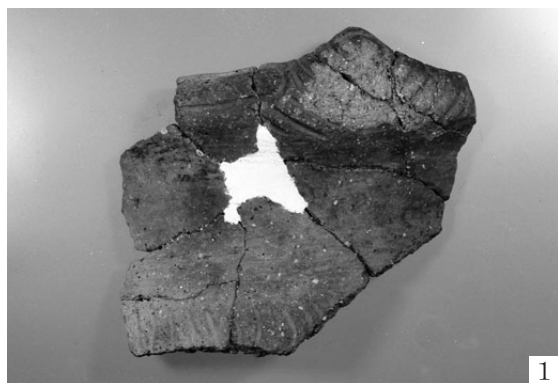


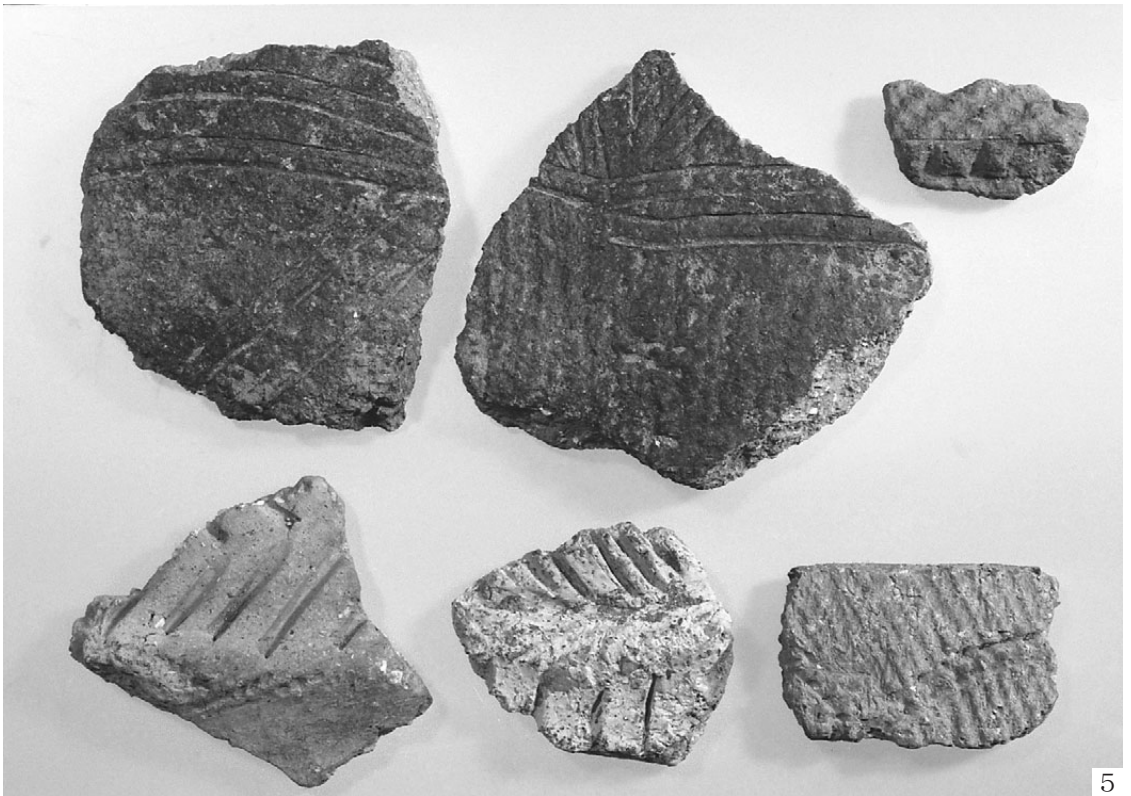
1. 甕棺 III



2. 甕棺 II









1. 縄文時代後期前葉



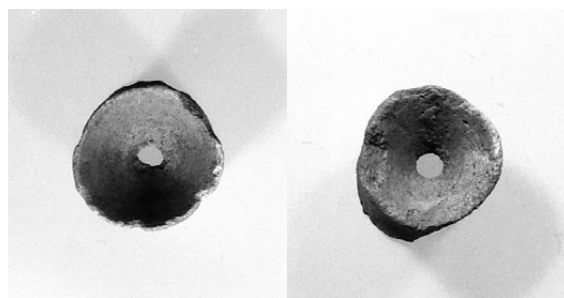
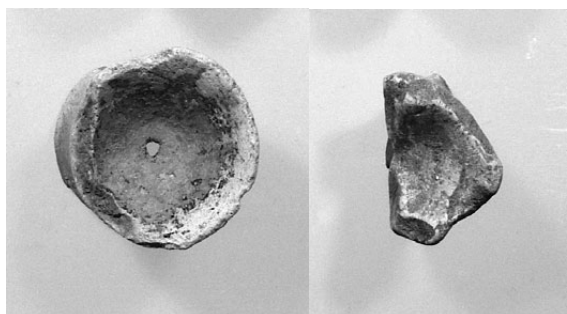
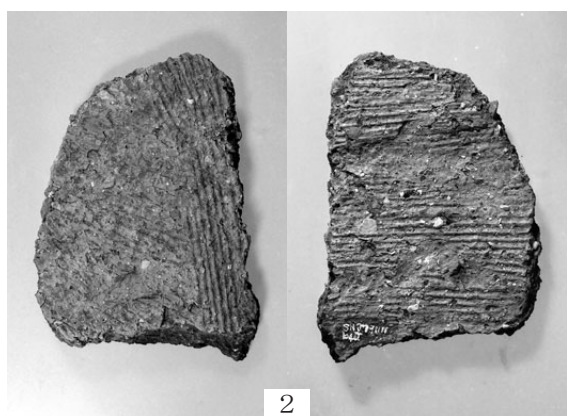
2. 縄文時代後期前葉



1. 縄文時代後期前葉



2. 縄文時代後期前葉



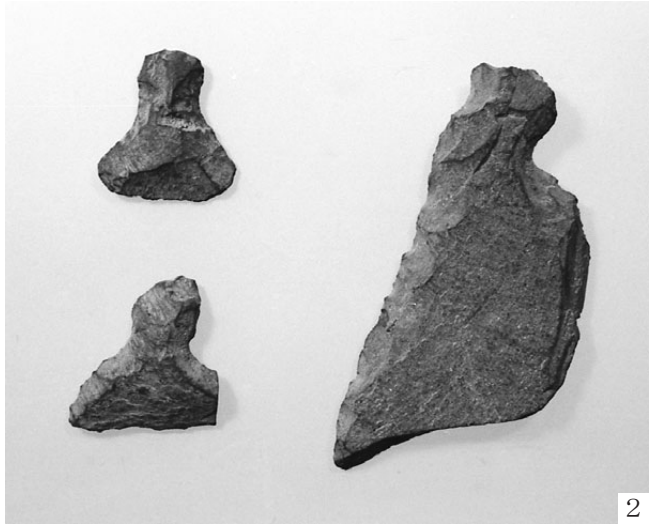
7. 耳栓形耳飾



1. 石 鏃



2. 石 錘



京都大学植物園内縄文遺跡

編 集 京都大学文学部考古学研究室内
文化財資料整理室

発 行 京 都 大 学

発行年月日 昭和49年11月30日

印 刷 所 京都市中京区西ノ京樋ノ口町14
㈱ 西村信天堂